遊戯王5D's　霊使いと六人の決闘者

蟲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王５Ｄ'ｓ　霊使いと六人の決闘者

【Ｎコード】
Ｎ５２１４Ｘ

【作者名】
蟲

【あらすじ】
新パックの発売日、大神（おおがみ）　刀侍（とうじ）達六人はデュエルアカデミアの寮に集まり買ってきた新パックを開けようとしていた。
みんながパックを一斉に開けた瞬間・・・！？
これはゼロ・リバースが起こらなかった５Ｄ'ｓの世界を舞台に繰り広げられる霊使いと六人の決闘者とのもう一つの物語である。

霊使いと六人の決闘者（前書き）

初めまして。作者の蟲です。
今回は本編ではないので「楽しんで下さい」と言っても難しいですね。

霊使いと六人の決闘者

世界観・人物紹介

世界観：遊戯王５Ｄ－ｓと書いておりますが。実際は５Ｄ－ｓの「ゼロ・リバースが起こらなかった世界」という原作とは違うパラレルワールドが舞台となっており歴史も少し変化しています。なので自分の解釈で書いていきますので、そういうものが苦手な方にはオススメできません。

主人公はデュエルアカデミア高等部に通う大神（おおがみ）　刀侍（とうじ）という青年です。まあ、彼の事は人物紹介にて。

大神達が六人の霊使いに会い数々の苦難に立ち向かったり立ち向かわなかったりします。

という感じです。というかさわりすらの部分しか話なしていないような気がしますが、しかし、このまま書いていくと調子に乗って重要な部分まで書いてしまいそうなので次に移りたいと思います。

（ＴＡＧ　ＦＯＲＣＥのキャラも出す予定です。）

人物紹介：

大神（おおがみ）　刀侍（とうじ）

彼は一応この物語の主人公です。

デュエルの腕前はなかなかでたまにチートドロー等したりします。

とある人物と付き合っているが本人はそんな事は微塵も感じてはいない。

デッキ「真六武衆」

黒木（くろき）　竜（りゅう）

大神と共にデュエルアカデミアに通う美青年です。（例えるなら愛想の良いセフィ〇ス）
彼は裏サイバー流の後継者。その事が原因で過去何度かいじめにあっている、そのこともあってか人を遠ざけるところが多々あったが。
大神と出会って以降は少しずつ良くなっていっている。
彼自身、裏サイバー流を気に入ってはいるがいつもは他のデッキを使っている。

デッキ「真紅眼の渓谷」
「裏サイバー流の竜騎士」

ツァン　ディレ

ＴＦのキャラクター。
名前の通りツンデレです。
成績は優秀でデュエルの腕も申し分なし。
彼女は大神の幼なじみで自称彼女。（とある人物とは彼女の事）
大神と二人っきりになると、たまに異常にデレる時がある。その現場に他人に見られると顔を真っ赤にして暴れるか倒れる。

デッキ「真六武衆」

東谷（ひがしだに）　鉄平（てっぺい）

デュエルアカデミアの風紀委員長で大神達の良き兄貴。
黒木には過去何度か色々な助言等をしてくれ黒木の良き理解者の一人である。
セュリティに知り合いがいるらしい。

デッキ「スクラップ」

雪代(ゆきしろ)　星(せい)

デュエルアカデミアの生徒会役員で「ルーンの瞳」の所持者で「オーディン」「トール」「ロキ」三体を所持している（このためハラルド達はルーンの瞳を所持していない。）、鉄平とは付き合ってはいないものの、切っても切れない縁。
人をいじるのを生きがいとしていて、大神とツァンは星の事は少々苦手。鉄平曰わく「あの程度は序の口だ！」

デッキ「三極神」

不動(ふどう)　遊星(ゆうせい)

遊戯王５Ｄ'ｓの主人公。
原作の遊星とほとんど変化がない。
ゼロ・リバースがなかったため両親は健在で、サテライトには数回しか行ったことがないため「チーム　満足」（サティスファクション）の存在すら知らない。
大神達とはデュエルアカデミア入学時からの親友である。

デッキ「波動竜騎士」

霊使いと六人の決闘者（後書き）

今回は本編ではありませんでした。
本編は次回からです。
今回が初めての投稿になるのですが。
私からいくつかお願いがあります。それは作者は書いたとおり初めての投稿なので色々と不慣れな点がございます。ですから質問をされても返答が返せない場合がございます。
二つ目、作者は精神面がとても弱いので苦情等はなるべく書かないで下さい。
面白い小説を書けるようにしていくので、温かい目で見守って下さい。

第一話「始まり前編」（前書き）

「遊戯王５Ｄ'ｓ　霊使いと六人の決闘者」本編が始まりました。
待っていた人はほとんどいないでしょう。
ですがそんな事は気にせず書いていきます。

第一話「始まり前編」

第一話「始まり前編」

???視点

カーテンの隙間から光が差し込む。
ここはとある学園の寮の一部屋
その部屋には二人の男子生徒が寝ていた。
まだ起きるには時間には速い時間帯だ。
二人の生徒は顔立ちは良く。
普通ならばとてもほほえましい光景だ。

ーだが今日は違った。
彼らの顔は何かにうなされていてとても苦しそうだった。
彼らは一つの言葉によってうなされていた。

「助けて。」

その声がだんだん強くなってくる。
それとともに彼らも苦しんでいた。

「助けてぇ!!」

その声が怒鳴るように言った瞬間、一人は目を覚ました。

「はぁはぁ、嫌な夢だったな。」

そう言い汗を手で拭う。

「うっうぅぅ」

「ん？」

青年は下のルームメイトの異変に気付き、即座にベットから飛びルームメイトに駆け寄る。

「おい竜、大丈夫か？」

ルームメイトは声をかけられ、すぐさまに起き上がる。

「あ、ああ、大丈夫だ。刀侍、すまないな。」

「大丈夫つたって、お前すげー汗かいてんじゃねーか。」

「そういうお前こそ大丈夫か？」

そう言って、竜は首もとを指差した。

「あ、」

そして気付く自身も大量の汗をかいている事を。

「あー、これじゃ、人の事心配している場合じゃねーな。」

「まったくだな。まずは何か飲もう、このままじゃあ脱水症状になりそうだしね。」

「賛成。」

そう言って、二人は冷蔵庫まで行った。

二人同時にうなされていたことを忘れ。

刀侍　視点

「しかし、二人同時とは変なこともあるもの。」
竜が突然言った言葉に俺は首を傾げる。
その表情を見て竜は苦笑しながら答えた。

「いかにも解らないといった表情だね。」
「うるせーよ、で、何の話しだ？」
「ん？ああ、今朝の事だよ。」
「そうか？たまにあるんじゃねーの。」
「いやいやいやないだろ。」
「そんな事はどうでもいいんだよ。なんたって今日は、今日は。」
俺が適当に答えたことに竜はなにやら反論しているが無視。
だって今日はあの日なのだから。

「そうだ！今日は待ちに待った新パックの発売日だぜー！」
そう今日は新パックの発売日なのである。なのに、この男ときたら。

「ああ、そういえばそうだったね。」
「なんだー！そのそっけない態度は！それでも貴様は決闘者（デュエリスト）かー！」
「何だよ急に怒鳴ったりして、びっくりするじゃないか。」
「新パックだぞ、し・ん・パッ・ク。何も思わねーのか？」
「いや、僕としても嬉しいけど。」
「けど？」
「そこまではしゃぐほどのことではないと思うよ。」

何てこったこの男は、新パック発売日だというのにこのテンションの低さ。
ありえん！！
くそ、この男にデュエリストの何たるかをいつか教えねばなるまい。

「刀侍ぃぃぃぃ！」
「ん？この声は。」

そんな事考えていると、突然後ろ俺を呼ぶ声が聞こえた。

（間違いない、この声の主はアイツだ。でも振り向くの面倒だしな。あー、でもなー振り向かないとそれもそれでぇ「くらえぃ！」「ぐはぁ！」

そこから俺の意識はとんでしまった。

竜視点

刀侍は何者かに蹴られて放物線を描き1メートルくらい前方の草むらまで飛ばされた。
というか、何者かと表すのは失礼だろう。
何故なら彼、否、彼女は刀侍や僕の知り合いなのだから。

「おはよう。今日もまた一段と元気だね。」
「はぁはぁ、黒木じゃない。」
「それで今日は、何で怒っているんだい？ツァン。」

ツァンは息を整えると僕の疑問に答えた。
彼女はツァン　ディレ。
彼女曰わく自称刀侍の彼女だ。

「あれ（刀侍）が、昨日、一緒に登校しようって、言ったのに部屋に行ったらいないじゃない！」
「僕に言われてもな～、というかアカデミアの敷地が広いといえども、寮から校舎までじゃあ、さほど話せないと思うよ。」
「別にいいじゃない、誰も一緒に登校する人がいないじゃないかと思って一緒に行こうって誘ったのよ！別に刀侍を好きとかじゃないんだからね！」
「さいですか。」
「おーい！」
「「ん？」」

などと話していると、また後ろから声が聞こえた。
振り向くと、特徴的な髪型の青年（例えるなら蟹かな）が走っていた。

「あ、遊星じゃない。」

ツァンが青年の名前を言う。
彼の名前は不動　遊星。
彼は僕と刀侍が知り合う前からの刀侍の親友である。
彼の両親は研究者で、歴史にのこる何かを発見した人達だったはず。
そんな事を思い出していると、遊星が話し掛けてきた。

「竜にツァン、こんな所でどうした遅刻するぞ。」
「ん？ああ、確かにそろそろ急がないとまずいわね。」

「ああ、ところで刀侍はどうしたんだ？お前達と一緒にいないなんて珍しいじゃないか。」
「「あ！」」
そこでやっと僕達は刀侍の事を思い出した。

刀侍視点

目が覚めたときには全ての授業が一つ終わっていた。
そして今やっと授業が終わったところだ。
くそ、ツァンのやつめ本気で蹴りやがって。まだ少し痛みがあるわ。
などと頭の中で愚痴っていると竜が話し掛けてきた。

「刀侍はこの後、カードショップにいくのかい？」
「当たり前だろう。でもその前に「ツァンや遊星や鉄平さん達にも声はかけておいたよ。」「お、おお、そうか。じゃあこのままカードショップに直こu「何だ今からカードショップにいくのか？」「「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」
「何を担任の顔見て驚いとるんだか、おまえ達は。」
「後藤先生、いきなり声をかけないでください。」
いきなり現れたこの男は俺達のクラスの担任の後藤（ごとう）　健二（けんじ）だ。
しかし、この男は我がクラスの担任ながら音も無く忍び寄るとは恐ろしい。
「そこまで驚くとは思わんかった。いやー、すまんすまん。」
絶対わざとたこいつ。

「しかし、おまえ達カードショップに行くんだろ？だったらお目当てはコイツだろ。」

と言うと後藤は周りを見て「ヨシ」と言うと持っていたカバンを開けた。
そして中をみて俺達は驚愕した。

「な、これって！」
「何で先生がこれを？？？？」
「さぁ、何でかな。」

カバンに入っていたのはなんと新パックの山だった。
その数は十や二十どころではない。
その数はぱっと見でも百以上あることが分かる。
そして、一つの疑問が浮上する。

「何であんたが新パックを百数十個も、持ってんだよ。」

その答えはすぐに返ってきた。

「暇だったから雑誌を見てたらあったから応募したら当たったんだよ。」
「「さいですか。」」
「それで何で俺達に見せるんだよ？」
「ああ、おまえ達に半分やろうと思ってな。」
「「！！！」」

その言葉に俺達は驚く。

「何で！？」
「ん？それはな。」
「「それは？？」」
「これだけのカードパックを開けるのは面倒くさいからな。」
「・・・・」

なんとも昼行灯の後藤らしい答えだった。

第一話「始まり前編」（後書き）

今回はデュエルどころか霊使いすら出てきていませんでした。
次回は霊使いは出せるようにします。

第二話「始まり後編」（前書き）

久しぶりの投稿になりました。
今回は「霊使い」編になります。
デュエルは今回もありません。（そろそろ書けよ俺）
では「遊戯王５Ｄ'ｓ　霊使いと六人の決闘者」
第二話始まります。

第二話「始まり後編」

???視点

話をしようじゃないか。

ここは精霊世界のとある里。
普段ならばここは風が気持ち良く、
モンスター達が助け合い支え合い生きてゆける、
静かで豊かな大自然が広がる場所である。

だが。今は違う。
風は熱く、
モンスター達は争い、
モンスターの怒号が飛び交い、
豊かな大自然は炎に包まれていた。

愚かなものだな。

ん?
彼らは何故この状況で力を行使しないのだ、
いや、力が脆弱なだけかもしれんが。
しかし、そうも言っていられる状況ではない筈だが。

ふむ、少し興味が湧いた。
彼らを観察対象に加えるとしよう。
彼らの名前は
・・・・・・・・・・・・・・
そうか「霊使い」か。
彼らのデータをシステムにリンク。
・・・・・・
おや？そろそろ時間か。
仕方がないな、
行くとするか。

ライナ視点

何故

私は最初にこの言葉が脳裏に浮かんだ。
だけど、その言葉をかき消すように一つの事が浮かぶ。それは、

みんなは無事だろうか？

どうしてそう思ったのかは解らない。
それを考えている暇も無い。
そう思うと思考よりも先に身体が動いた。
モンスター同士が争う中を私は走り抜ける。

（みんなどこにいるの？）

「あっ！ライナ！」
「えっ？」

みんなはどこ、そう思った瞬間、後ろから聞き慣れた声が聞こえた。
その方向を振り向くと、

「ヒータちゃん！それにみんな！」

そこにいたのは自身が探していた掛け替えのない友人達だった。

「ライナ！無事だったのね。」
「うん！みんなも無事だったんだね。良かった～。」

みんなが無事だった事に安堵する。
しかし、現実はそんな暇をあたえてくれない。

「安心するのは後！さぁ、行くよ。」
「へ？どこに？」
「セームベルちゃんの所です！」

ヒータちゃんの言葉を疑問に思う。
すると、ウィンちゃんが私の疑問に答えてくれた。

「話は走りながらするから、行くよ！」

そう言うとヒータちゃんが私の腕を引っ張る。

「今この霊使いの里にはインヴェルズ達が攻めてきている事は、気づいたてるよね？」
「「え？あれってインヴェルズなの！？」」
「な、気づいてなかったの！ていうかウィンは説明したでしょ！！」
「ふぇ？」

あれがインヴェルズだったなんて、まったく気がつかなかった。
というか、ウィンちゃん……

「話しを元に戻すわよ。」
「うん。」
「今、あんた達のお姉ちゃん達がインヴェルズと戦っているけど、
あとどれぐらい持ちこたえられるかは時間の問題なの。」
「お姉ちゃん達が！？」

その言葉を聞いて私とウィンちゃん、エリアちゃんの顔が暗くなる。

「悔しいけど、私達が加勢に行っても足手まといになるだけ、だか
ら私達は私達に出来る最低限の事をやるのよ。」
「私達に出来る事？」

確かに私達が行ったところでお姉ちゃん達がかなわない可能性があ
る相手と戦ったところで、
ヒータちゃんの言ったように足手まといになるだけだろう。
しかし、私達に出来る事とは一体何だろ？

「私達はこれから人間界に行くのよ。」
「に、人間界！？」
「そう、人間界よ。」

どうして人間界に行くのか全く解らない。

「ヒータちゃん、どうして私達が人間界に行くの！」
「えーと、たしか。」
「ここからは僕が説明するよ。」

「なっ、ダルク、あたしの出番を「ダルクちゃんどういうことなの？」ライナ！」

ヒータちゃんが忘れたようなので、ダルクちゃんがこの状況を理解しているようなので
ダルクちゃんに聞いてみる。

「簡単に説明すると、僕達は人間界に精霊世界を救ってくれる救世主を探しに行くんだよ。」
「救世主??それってどうい「セームベルさんの家が見えてきましたよ。」

まだ少し理解出来ていなかったため聞き返そうとするが、エリアちゃんの言葉に遮られる。

「みんなー！準備は出来てるよ！」
「セームベルちゃん！」

遠くから声がした方向を向くと召喚師のセームベルちゃんが手を振っている。

「再会を惜しむのは後！今から契約召喚の説明をするからよく聞いてね。」
「?契約召喚??」

セームベルちゃんが聞き慣れない単語を聞いてそのまま言葉を返してしまう。

「契約召喚っていうのは、その名の通り召喚とともに契約を行うの、でも自分では契約者（マスター）は選べないのよ。」

「えっ？ではどうやって契約者を選ぶのですか？」
契約召喚についてセームベルちゃんが説明していると、エリアちゃんが疑問を投げ掛ける。
「契約者についてですが、直接は契約者は選べませんが、間接的には選ぶことが出来ます。」
「それはいったいどういう事ですか？」
「説明するとですね、私達モンスターの思いに反応した存在が契約者に選ばれるんです。」
「？、？？」
「えーとですね、簡単に説明しますと、力を欲しいと思えば力がある存在が契約者となるという事です。」
セームベルちゃんの簡単な説明によって私達はなんとか理解する事ができた。
その様子を見て満足げに説明を続ける。
「なので、あなた達には契約召喚をする際には、思いを強く持っていてください。」
ゴオォォォォォォォ！
「ッ！時間がありません！家の中に入って魔法陣がある中心の部屋に行ってください。」
私達は揺れが強くなっていく部屋走り抜ける。
そして私達はやっと部屋についた。
「みなさん！魔法陣の中に入ってください！」

みんなが魔法陣に入ったのを確認するとセームベルちゃんが詠唱にはいった。
すると魔法陣が光り出す。
そして魔法陣の下に門が現れた、
そしてセームベルちゃんが詠唱を終えると私達に話し掛けてきた。

「最初は契約者の中にみなさんは召喚されます。その世界に完全に召喚されるには契約者が何か特定のことをしなくてはなりまん。」
「えっ？」
「その状態では通常は契約者とは会話出来ません！ですが契約者が眠ったり、気を失うような事があれば何かヒントを与える事が出来るはずです。」

そして門が開き出した。

「ですがそれは契約者とまだ契約は済んでないので契約者は多大なる負担が予想されます。ですので慎重におこなって下さい。」

私達はそれをを聞いた後に門に吸い込まれるように落ちていく、
門が閉められるのと同時に私達は気を失った。

次に目が覚めたのは何も無い白い世界だった。
否、何者かがいる。
その何者かは光を帯びていてよくは見えなかった。
その何者かが話し掛けてきた。

お前は一体何がほしいんだ？
・・・・・・け
あ？
た・・・・け
聞こえねーぞ。
助けて
まだ聞こえねーぞ！
助けてぇ！

ふーん、そうかよ助けて欲しいのか。

その言葉に首を縦に振る。

へっ、いいぜだったらとことん助けてやる！
イヤと言っても助けるからな。
何故なら
この大神　刀侍と契約するんだからな！！

第二話「始まり後編」（後書き）

今回もデュエルは書けませんでした。
デュエルを求める方には本当にすみませんでした。
ですが、次回はデュエルをさせるつもりです。

第三話「とりあえず決闘」（前書き）

だいぶ遅くなりもうしわけありませんでした。
今回はデュエルします。（やっとかよ！）

第三話「とりあえず決闘」

竜視点

後藤先生から新パックを貰った僕達は廊下で偶然出会った、ツァンと遊星と共に校門の前に来ていた。

「そういえば、鉄平達遅いな？」
「ああ、鉄平さん達なら学校の会議で遅れるそうだよ。」
「じゃあ仕方がないな、うーん・・・よし、それじゃあ、」

刀侍に鉄平さん達の事を教えると、刀侍は何かを心に決めたかと思うと、ある事を宣言した。

「デュエルでもやるか！」
「賛成。」

僕は刀侍の即答したが、ツァンと遊星は違った。

「あたしはデッキ調整中だから今回はパス。」
「俺も同じだ。」
「えー、デッキ調整中かよ、まあ仕方がないな。」
「すまん。」
「あたしだって刀侍と一緒にでゅ、でゅ、デュエルしたいのよ！」
「じゃあ、竜とデュエルか。ん？ツァン何か言ったか？」
「何も言ってないわよ！！」

ツァンと刀侍のやりとりを見て苦笑した。
刀侍は話しを終えるとデュエルディスクの用意を始めたので僕も用

意を始める。

「俺は準備は出来たけど、竜は？」

「僕も準備出来たよ。」

「それじゃあ行くぜ！」

「来い！」

「「決闘（デュエル）」」

刀侍視点

「先攻は俺が貰うぜ、ドロー！」

大神　刀侍
ＬＰ４０００
手札５→６
伏せカード無し

黒木　竜
ＬＰ４０００
手札５
伏せカード無し

「俺は手札の六武の門と六武衆の結束を発動する。」

「六武の門か。」

六武の門
永続魔法
「六武衆」と名のついたモンスターが召喚・特殊召喚される度に、

このカードに武士道カウンターを２つ置く。
自分フィールド上の武士道カウンターを任意の個数取り除く事で、以下の効果を適用する。
●２つ：フィールド上に表側表示で存在する「六武衆」または、「紫炎」と名のついた効果モンスター１体の攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで５００アップする。
●４つ：自分のデッキ・墓地から「六武衆」と名のついたモンスター１体を手札に加える。
●６つ：自分の墓地に存在する「紫炎」と名のついた効果モンスター１体を特殊召喚する。

六武衆の結束
永続魔法
「六武衆」と名ついたモンスターが召喚・特殊召喚される度に、このカードに武士道カウンターを１個乗せる（最大２個まで）。
このカードを墓地に送る事で、このカードに乗っている武士道カウンターの数だけ自分のデッキからカードをドローする。

俺がカードを発動すると後ろに戦国時代の門ようなものが現れた。

「そして俺は六武衆ーイロウを攻撃表示で召喚する。さらに手札の真六武衆ーキザンの効果により真六武衆ーキザンを特殊召喚する」
「いきなり２体も召喚してくるなんて。」

六武衆ーイロウ
レベル４・闇属性・戦士族
ＡＴＫ／１７００
ＤＥＦ／１２００
自分フィールド上に「六武衆ーイロウ」以外の「六武衆」と名ついたモンスターが存在する限り、裏側守備表示のモンスターを攻撃し

た場合、ダメージ計算を行わず裏側守備表示のままそのモンスターを破壊する。
このカードが破壊される場合、代わりにこのカード以外の「六武衆」と名ついたモンスターを破壊する事ができる。

真六武衆ーキザン
レベル４・闇属性・戦士族
ＡＴＫ／１８００
ＤＥＦ／５００
自分フィールド上に「真六武衆ーキザン」以外の「六武衆」と名ついたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
自分フィールド上にこのカード以外の「六武衆」と名ついたモンスターが表側表示で２体以上存在する場合、このカードの攻撃力・守備力は３００ポイントアップする。

「そして六武の門と六武衆の結束の効果により武士道カウンターを乗せる。」

六武の門×４
六武衆の結束×２

「そして六武の門の効果を発動する、六武衆の結束と六武の門から武士道カウンターを取り除きデッキから手札にと真六武衆ーミズホを手札に加える。」

刀侍
手札２→３

「うっ、ミズホか。」

真六武衆ーミズホ
レベル３・炎属性・戦士族
ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／１０００
自分フィールド上に「真六武衆ーシナイ」が表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカード以外の自分フィールド上に存在する「六武衆」と名ついたモンスター１体をリリースする事で、フィールド上に存在するカード１枚は選択して破壊する。

六武の門×４→２
六武衆の結束×２→０

「カードを１枚セットしてターンエンド。」

刀侍
手札２
ＬＰ４０００
モンスター×２
魔法・罠ゾーン×３
フィールド魔法無し

「やっとか僕のターン、ドロー。」

竜
手札５→６

「僕は手札から手札抹殺を発動する。」
「えー、まじかよ。」

刀侍
手札２→０→２

竜
手札５→０→５

「手札からサイクロンを発動して六武の門を破壊す「罠発動！魔宮の賄賂。」くっ、カードを１枚ドローする。」

本当はこんなところで賄賂はつかいたくはなかったんだけどな。

「よし、調和の宝札を発動、手札を１枚捨て２枚ドローする。」

竜
手札５→４→６

サイクロン
速攻魔法
フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を選択して破壊する。

魔宮の賄賂
カウンター罠
相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。
相手はデッキからカードを１枚ドローする。

調和の宝札
通常魔法
手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー１体を捨てて破壊する。

自分のカードを2枚ドローする。

「手札からフィールド魔法、竜の渓谷を発動する。」

「げっ、竜の渓谷なんか発動するなよ。」

「いや、普通に発動するよ。」

などとやりとりをしている間に周りが谷に囲まれ青かった空が夕陽に染まる。

「竜の渓谷の効果により手札1枚捨てデッキからドラグニティと名のついたを手札に加える。僕は真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）を墓地を送りドラグニティードゥクスを手札に加える。」

「え？レッドアイズ？」

「そしてドゥクスを召喚し効果により墓地のドラグニティーファランクスを装備、ファランクスの効を発動しフィールド上に特殊召喚する。」

「調和の宝札の時に墓地に送ってたのかよ、で、チューニングでもするのか？」

「いや違うよ、ファランクスを除外し僕はレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚する。」

「！？」

竜の渓谷

フィールド魔法

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で以下の効果から1つを選択して発動する事ができる。

●自分のデッキからレベル4以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

●自分のデッキからドラゴン族モンスターを墓地へ送る。

ドラグニティーファランクス
レベル２・風属性・ドラゴン族・チューナー
ＡＴＫ／５００
ＤＥＦ／１１００
このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。
装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

ドラグニティードゥクス
レベル４・風属性・鳥獣族
ＡＴＫ／１５００
ＤＥＦ／１０００
このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードの数×２００ポイントアップする。
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル３以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスターを１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

真紅眼の黒竜
レベル７・闇属性・ドラゴン族
ＡＴＫ／２４００ＤＥＦ／２０００
真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを焼き尽くす。

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
レベル１０・闇属性・ドラゴン族
ＡＴＫ／２８００
ＤＥＦ／２４００
このカードは自分フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族モ

ンスター1体をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。
1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体をフィールド上に特殊召喚する事ができる。

まずいな、まさかレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンが来るなんてな。
そんな事を考えているとフィールド上に鋼鉄の鎧のようなものを鱗を持つ黒竜が現れた。

「そして僕はおろかな埋葬を発動しドラグニティアームズーレヴァテインを墓地に送る。」
「やっぱ。」
「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動する。墓地に存在するこいつ以外のドラゴン族モンスターを特殊召喚する、僕が選択するのはドラグニティアームズーレヴァテイン！」

おろかな埋葬
通常魔法
自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

ドラグニティアームズーレヴァテイン
レベル8・風属性・ドラゴン族
このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードを装備したも1体をゲームから除外し、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、「ドラグニティアームズーレヴァテイン」以外の自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事

ができる。
このカードが相手のカードの効果によって墓地に送られた時、装備カード扱いとしてこのカードに装備されたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

先程出てきた黒竜が天に向かって吼えた。
すると雲が裂け中からドラグニティアームズーレヴァテイン現れた。

「ドラグニティアームズーレヴァテインの効果を発動、墓地に存在するレヴァテイン以外のドラゴン族モンスターを装備する。」
「それでレッドアイズを装備するんだろ。」
「その通り、真紅眼の黒竜を装備してバトルフェイズに入る！」

竜がそういうとモンスター達が臨戦態勢に入る。

「イロウにレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンで攻撃ダークネスメタル・フレア！」
「うぉ、」
「キザンにドラグニティアームズーレヴァテインで攻撃竜騎武装連斬！そしてドラグニティードゥクスで直接攻撃（ダイレクトアタック）！」
「うおぉぁ！？」

刀侍
ＬＰ４０００－３８００＝２００

「カードを1枚セットしてターンエンド。」

竜
手札１
ＬＰ４０００

モンスター×3
魔法・罠ゾーン×1
フィールド魔法「竜の渓谷」

「俺のターン、ドロー！……くっくっくっくっ。」

俺はドローしたカードを見て思わず笑ってしまった。

「な、何だよ急に笑ったりして。」
「いや何も。」
「いや、何かあるだろ！」
「今からわかるさ、まずはサイクロンで伏せカードを破壊する。」
「なっ！」

地ならし地ならし、さてと伏せカードはなにかな～てっ、聖なるバリアーミラーフォースー
かよ！！危ねー。

聖なるバリアーミラーフォースー
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「そして俺は手札から六武衆の結束を発動する。」

さて準備は整った。
うし！行くぜ！

「俺は真六武衆ーミズホを攻撃表示で召喚する。そして六武の門と六武衆の結束2枚に武士道カウンターを乗せ、六武の門の効果によ

って武士道カウンターを取り除き真六武衆－シナイを手札に加える。」

六武の門×２↓４↓２
六武衆の結束×０↓１↓０
六武衆の結束×０↓１↓０

真六武衆－シナイ
レベル３・水属性・戦士族
ＡＴＫ／１５００
ＤＥＦ／１５００
自分フィールド上に「真六武衆－ミズホ」が表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
フィールド上に存在するこのカードがリリースされた場合、自分の墓地に存在する「真六武衆－シナイ」以外の「六武衆」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

「そして真六武衆－シナイを特殊召喚し武士道カウンターを乗せ、武士道カウンターを取り除きミズホを手札に、ミズホを特殊召喚しカウンターを乗せて取り除きキザンを手札に加える。」
「………………………………………………………………………………………え？」
「ミズホの効果を発動、シナイをリリースしてレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを破壊し、シナイの効果でミズホを手札に加え特殊召喚し効果を使ったミズホをミズホの効果でリリースしてドラグニティアームズ－レヴァテインを破壊する。」
「……レヴァテインの効果で真紅眼の黒竜を特殊召喚する。」
「ミズホの効果でシナイをリリースして真紅眼の黒竜を破壊しミズホを手札に加える。門の効果によってキザンを２枚手札に加えキザンを３体特殊召喚し六武衆の結束を墓地に送り４枚ドローする。」

刀侍
手札1→5
「さぁて、キザン3体の効果により攻撃力が300ポイントアップする。さらに六武の門のカウンターを取り除き、キザンの攻撃力を500ポイントアップする。」
「攻撃力2600が3体も・・・！」
「キザン2体でモンスターに攻撃。」
「ちっ、」
竜
LP4000ー1100＝2900
「残りのモンスターで直接攻撃。」
「ちくしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
竜
LP2900ー5800＝ー2900
今回は危なかったな。ぎりぎりだったたし竜も楽しめだろうしな。
暗くなってる気がするけど気のせいだよね・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・多分

第三話「とりあえず決闘」（後書き）

今回は刀侍と竜のデュエルでした。
というか霊使いがまだ主人公達と直接会ってない！？
そろそろ会わせないとまずいな。
なので近いうちに出そうと思います。
できれば次あたりかな。

第四話「邂逅」（前書き）

最近、学校行事が多すぎる。
デュエルやれてねー！
デュエルやりてー！
そんなに行事をいっぺんにやらなくたっていいのにな。

今回は短めの話になっております。

第四話「邂逅」

遊星視点

刀侍と竜のデュエルが終わり、「もう一戦やらないか？」と言う刀侍に竜が泣きそうな顔で抗議している。
すると、刀侍が諦めたのか俺に話しかけてきた。

「なあ、遊星。」
「どうした。」
「今のデュエルはどうだった？」
「んーそうだな。六武の門の使い方は良かったと思うが、和睦の使者を使われてたら少しまずかったんじゃないか。」
「ああ、たしかに手札もあったしな。」

などと刀侍と俺がデュエルの反省していると、刀侍が何かを思い出したように話しを変えてきた。

「そういえば遊星は最近寝ている時にうなされたりしたか？」
「ん？そんな事を聞くなんてどうしたんだ？」
「いやー、今日俺と竜が二人でうなされてさ、それで竜が気になってるみたいなんだよ。」
「今日？」
「？あ、ああ、今日だけど。」
「実は俺も今日うなされたんだ。」
「へ？」

俺の言葉に刀侍は意味が分からないといった返事をした。

「それって本当か「と、刀侍。」なんだよツァン。」
刀侍が俺に聞き返そうとしたときツァンが会話に割り込んできた。
そしてツァンの次の言葉に俺達は驚愕した。
「実はあたしも今日うなされたんだけど……」
「「「……」
あまりの事に俺達は思考が停止してさまう。
その時、
「おまえら黙っててつまらなくないのか？」
「そうよ、何も話さないと楽しめないわよ。」
校門から出て来た鉄平と星が話しかけてきた事により思考が正常に戻った。
話の内容が衝撃的すぎて俺達は内容を忘れてしまった。

刀侍視点

「しかし、あの後藤さんが新パックをタダでくれるとはなー」

鉄平達が校舎から出てきた後、俺の寮に移動した。

そして今話しているのが東谷　鉄平

鉄平は俺達（星を除く）の先輩で風紀委員長だ。

鉄平とはデュエルアカデミア入学前からの縁だ。

そしてもう一人は、

「必ず何かあるわね。」

こいつは雪代　星

鉄平と同じく俺達の先輩で生徒会役員。

俺とツァンが苦手とする天敵。

たしか、神に選ばれた証のルーンの瞳の所持者だったかな。

なんで神様はこんなS女を選ぶかな、もっとましなのがいるだろうに。

いや、神様から奪ったのかもしれない。
俺がそんな事を考えていると、
「大神くん何か失礼な事考えてない？」
「ッ！？な、何も失礼な事なんて考えてませんよ！」
「ふーん、そう。」
この人はやっぱ苦手だ。
「なあ刀侍。」
「どうしたんだ鉄平？」
星に対しての苦手意識を再確認していると、鉄平が声をかけてきた。
「竜にいったい何があったんだ？」
「ああ、俺もよくわからんけどなんか俺とデュエルしてからなんだよ。」
「デュエルしてから、ああ、そういう事か。」
「ん？わかったのか。」
「・・・いや何でもない。」
何なんだ？
そして何で星は可哀想なものをみているような眼をしているんだ。
「そんな事より、新パックを開けないか。」
すると遊星が話題を変えるためか、本当にパックを開けたいのかわからないが（恐らく両方だろう）パックを開けようと提案してきた。

「賛成。」
「うお！？竜！びっくりさせんな。」
竜が復活した事に驚きつつ文句を言う。
「俺も賛成だぜ。」
「あたしもよ。」
「ボクも賛成。」
「よし満場一致だし全員でパックを開けようぜ。」
「じゃあ、あたしはこれかな。」
「お、そんじゃあ俺はこれだな。」
一人一人がパックを選んで取っていく。
後藤から貰ったパックは６０パックなので一人１０パックだな。
全員が１０パック取っていくと鉄平がある提案をしてくる。
「最初のパックは一斉に開けねーか？」
「そりゃ面白そうだな。」
「まあ、楽しそうかな。」
「んじゃ、全員で一斉に開けようぜ！」
鉄平の提案がとおる。
「せーので、開けるぞ。」
「遊星。せーのはないんじゃないか。」
「そうか？」
「ここは、いくぜ！だろ。」
「何でもいいよ！早くしないと開けるよ。」
「わ、わかった、せーのでいいからまだ開けるな！」

遊星の掛け声に対して否定しているとツァンがパックを開けようとするので説得する。
大切だと思うけどなぁ。

掛け声

「刀侍！掛け声頼んだぞ。」
「よしまかせとけ！」
「せーの！」

ビリッ

全員で一斉に開ける。
すると、

六つのパックから一筋の閃光が上がる。

「ッ！？」

光が強すぎて全員が眼を手で覆った。
数秒後に光が収まった。
全員の無事を確認しようと眼を開けようとするが眼に焼き付いて開けられない。
全員で声を掛け合い無事を確認しようとする。

「無事か！」

「俺は大丈夫だ。」
「ボクも大丈夫。」
「こっちの竜と星も大丈夫だ。」

俺が無事を確認すると最初に遊星、ツァン、鉄平、竜、星という順で教えてくれた。

くそ！一体何なんだよ！
後藤のやろうか？
いや、後藤に限ってこんな回りくどい事はしないだろう。
それじゃあ一体これは何だ？

そんな事を考えていると視界がはっきりしてくる。

「・・・スタァ・・」

なんかかすかに幻聴まで聞こえてきた。
やっと視界はっきりした事を感じ。
無事を再確認すべく眼を開けた。

「みんな無事か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！？」

眼を開けた俺は驚愕した。

なぜなら。

眼前には見知らぬ少女達がいた。

否、

そこにいる少女達は面識はないが知っている

それは

デュエルモンスターズのあるカード

霊使いである。

第四話「邂逅」（後書き）

今回でやっと刀侍達と霊使いが出会いました。（やっとかよ！）
という事なのでここからは刀侍くん達に予告をしてもらうかな。（
という事ってどういう事だよ！）

んじゃ！刀侍くんまかせたよ☆

「まかせたよ。じゃねーよ！何が☆だ！！」
「落ち着け刀侍！」
「これが落ち着いていられるかー！ちょっくら俺は作者を殴ってくるから遊星！後は頼んだぞ！」
「なっ！おい刀侍って、もうあんな所に……仕方ないな。」

パックから出た閃光に包まれた俺達、
次の瞬間、眼前には少女達がいた。
その少女達は自らをカードの精霊だと
言う、
そして少女達は俺達に思いも寄らぬ事
は口にする。

次回、遊戯王５Ｄ－ｓ　　霊使いと六人の決闘者
「救世主」

ライティングデュエル！
アクセラレーション！

第五話「救世主」（前書き）

今回は投稿に時間がかかりました。

ていうか一話書くごとに遅くなっている気がするが気のせいですよね。（多分）

さ、さあ気を取り直して本編を読んで下さい。

第五話「救世主」

刀侍視点

一体これはどういう事だ。
まずは冷静に状況を理解するんだ。

たしか、俺達はパックを開けるために寮の俺の部屋に来たんだよな。
それで、幾らか話してから俺達はパックを開けた。
うん。ちゃんと覚えているな。

問題はここからだ、俺達はパックを開けたらいきなりパックから光が上がって、気づいたら目の前には少女達（霊使い達）がいた。

冷静になって状況を考えた結果
まったく訳が分からないィィィィ！

「あ、あの～大丈夫ですか？」

一人で考え込んでいると少女の一人（恐らくライナ）が話しかけてきた。
そうだ！分からないなら聞けばいいじゃん。
しかし、何を聞けばいいのだろうか？
などと悩んでいると、同じ事を考えていたのだろう星が質問を始めた。

星の質問はこうだった。
1．少女達の名前
2．少女達は何者なのか

3．パックの光は何だったの
4．少女達の目的
この4つだった。

まず、最初の質問の名前に答えてくれた。
名前はやはり霊使い達と同じ名前だった。

次の質問には精霊世界の魔法族の里の霊使いだと答えた。
精霊世界について疑問を浮かべていると水霊使いのエリアが答えてくれた。

「精霊世界とは簡単に言えばこの世界とは違う世界の事で、私達のような精霊が暮らしている世界です。」

と、分かりやすく教えてくれた。

3つ目の質問には曖昧な答えが返ってきた。
それというのも少女達もあまり理解していないらしく、闇霊使いのダルク曰わく、

「恐らく召喚された時の光じゃないかな。」

などと言っていた。
分からないのなら仕方がない最後の質問に移った。

4つ目の質問は目的についてエリアが話し始めた。

「私達の目的は精霊世界を救ってくれる救世主を探す事です。」
「救世主？」
「そうです、救世主です。」

目的を聞いた俺達は驚いた。
俺達全員はこの話を嘘とは思えなかった。
理由はあまりにも話が突拍子すぎた事と、少女達の目が真実を言っている事を物語っていたからていたからである。

だが、話を聞いていて1つの疑問がうまれた。
たしかに救世主を探すのは良いとして、何故、俺達の目の前に現れたのだろうか？

その疑問はエリアの次の言葉で驚きに変化した。

「単刀直入に言います。どうか私達の契約者となり私達と共に精霊世界を救って下さい！」

この言葉により俺達の中の疑問は無くなった。
簡単に言ってしまえば俺達はその救世主とやらに選ばれた。
それなら全て合点が合う。

「いきなりこんな事を言われても信用できないでしょうが、私達にはこうする事しか出来ません。
お願いします！どうか私達の契約者に！」

エリアの必死さに面食らいつつこの事が事実だと認識した。
そして俺は少女達に自らが出した決意を言葉しようとする。
「俺の答えは「こりゃー、一体どうなってんだ。」「「「「「
「「「「「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」」」」」」」
」

しかし、昼行灯の後藤の登場（乱入？）により全員が悲鳴を上げた。

後藤視点

「まったく、いい加減になれろや。」

悲鳴が収まり一言もの申す。
すると刀侍が文句を言い出す。

「あんたはいい加減に気配を消すのを止めろ！」
「だからそれぐらいなれろよ！」

そんなやり取りをしていると鉄平が声をかけてきた。

「なあ、後藤さん。」
「ん？」
「あんたはどうしてこの場所にいて、一体どこまで話を聞いていたんだ？」
「ああ、それはだな……」

数分前に俺はお前たちが開けているパックの中身が気になって寮に向かってたんだ。

「ん！？」

するとお前らの寮から光が上がったじゃねか。
だから急ぎつつ冷静にお前たちの寮に入ってたら見知らぬ少女達がいるもんだから驚いちまってよ。
そんでとっさに陰に隠れから話を聞いてるとその少女達は精霊世界から来た霊使いだと言うじゃねーか。

で、そこからタイミングを見計らって出て来たてっところかな。
そこで俺は説明を終えた。

刀侍視点

後藤の説明が終わると鉄平さんが後藤に話し始めた。

「じゃあ、後藤さんは話をほとんど聞いてたんだよな？」
「まあ、そうなるな。」
「そんじゃあ説明は要らねよな？」
「そうだな。」
「だったら後藤さん、あんたもこれからの事について考えてもらうぜ。」
「んー、今回は面倒だ、なんて言っている場合じゃないからな仕方があるまい。だがなあ、」

鉄平さんの言葉に後藤は頷いたが何か疑問があるらしく言葉を続けた。

「こいつらが嘘を言っている可能性もあるんじゃないのか？」

たしかに、嘘をついている可能性は否定できない。だが俺はどうしても嘘をついているとは思えない。
すると星が後藤の疑問を否定した。

「彼女達は嘘は言ってないわ。」
「雪代、どうしてそう言いきれるんだ？」
星の言葉に疑問を投げかけると、星の片目が光り出した。
「ルーンの瞳がそう告げているのよ。」
「ああ、まあ神様の御告げなら信じておくか。」
星が言った事に後藤が頷く。
俺は星の言葉を聞いて何故かほっとした。
俺はほっとして冷静になったのかある疑問が浮かぶ。
「嘘を言ってないにしても救世主になって精霊世界を救うって一体何をすればいいんだだ？」
「たしかに、ねぇ、ボクたちはどうすればいいの？」
俺の疑問を聞いてツァンが同意した。
そしてツァンが火霊使いのヒータと思われる少女に疑問を投げかける。
「へ？あたし？えーっと、なんていうか、そのー……」
だが返ってきた返事はとても曖昧なものだった。
すると隣にいた闇霊使いのダルクと思われる少年が代わりに答える。
「僕達も詳しくは聞いていないけど多分まずはインヴェルズをなんとかするべきだと思うよ。」
「インヴェルズ？」
「そうインヴェルズだよ。」

「しかし、そのインヴェルズをどうすればいいんだ？」
「恐らくインヴェルズもこっちの世界に刺客を送ってきて僕達を消しにくる筈だ、僕達と同じように契約者を連れてね。」
「じゃあ、その刺客を何とかすればいいのか。」
「うん、だけど刺客は一人じゃなく何人かいるはずだよ。」
「え！？」

刺客が何人もいるどいう話を聞いて少し驚く。

「それにインヴェルズ以外の勢力なんかも刺客を送ってくる筈だ。」
「他の勢力？」
「でもこの話は後にしよう、第一目標としてまずはインヴェルズをなんとかしなけゃいけないし、それよりも、」
「ん？」
「誰が誰の契約者かをはっきりすべきなんじゃないかな？」
「あ！そうだねダルクちゃん！」

いきなりダルクが話を変えたため頭が状況を把握していない。
その様子に気づいたのかダルクが説明を始めた。

「契約者の判別はこの世界に儀式召喚された時に契約者の心の中で対話した時に分かるんだ。」
「へー」
「そしてもう一つだけ判別方法があるんだけど、恐らく私達と同名のカードを持っている筈だけど。」

その言葉を聞き話す時に自分が置いたカードを見た。
するとそこにあったカードを見てみると光霊使いライナのカードが置いてあった。
そして他のみんなのカードに視線を向けると竜は闇霊使いダルク、

ツァンは火霊使いヒータ、
遊星は風霊使いウィン、
鉄平は地霊使いアウス、
星は水霊使いエリア、
と全員がそれぞれの霊使いを持っていた。

「あのー、」

霊使いのカードを全員が持っている事に驚いていると水霊使いエリアと風霊使いウィンが申し訳無さそうに話し始めた。

「私達は心の中で対話して名前を聞くどころか対話すらしていないのですが。」
「え？」

その言葉はダルクにも予想外だったのだろう。
ダルクは言葉を発した後に考え込んだ。

数十秒経過するとダルクが分かったのか声を上げた。

「星さんでしたか、あなたは恐らくルーンの瞳のせいだと思いますよ。」
「ルーンの瞳がって一体どういう事？」
「恐らく星さんあなたの契約している神が強大すぎてエリアはあなたとの契約が正式に出来ないのでしょう。」
「そういう事。でも何で遊星くんは契約出来ないのかしら？」

星の疑問にダルクだけではなく他の霊使い達も考え込んでしまう。

「遊星さんに関しては僕達には分かりません。ですが星さんあなた

と同じ理由だと僕は考えています。」
「同じ理由？」
「そうです、遊星さんも恐らく強大な何かと契約を結んでいると思われます。」
その言葉を聞きこの場に数秒間の沈黙が訪れる。
「まあ、悩んだところで分からんもんは分からんのだから仕方あるまい。」
沈黙は後藤の言葉によって消え去った。
「しかし、お前たちはいつになったら自己紹介をするんだ？」
「「「「「「あ！」」」」」」
後藤の言葉で大事な事を思い出す。
そう俺達はまだ自己紹介を行ってないのだ。
「いやー、自己紹介もしてないのに気軽に話しかけて悪かったな。改めて自己紹介しよう俺の名前は東谷（ひがしだに）　鉄平（てっぺい）だ。」
「そうね、自己紹介もしないなんて失礼だったわ。私の名前は雪代（ゆきしろ）　星（せい）よ。」
「自己紹介しなかった事はすまなかった。俺の名前は不動（ふどう）　遊星（ゆうせい）だ、宜しくな。」
「私とした事が、自己紹介を忘れるなんて、あなた達には謝るわ、ごめんなさい。あたしの名前はツァン・ディレよ。」

「自己紹介をしないなんて失礼な事をしてすまなかった。
僕の名前は黒木（くろき）　竜（りゅう）、宜しくね。」

「自己紹介をしなくて悪かったな。
俺の名前は大神（おおがみ）　刀侍（とうじ）、これから宜しくな！」

これが霊使い達と俺達との出会いだった。

第五話「救世主」（後書き）

特に書く事がないので遊星くん予告お願い！

「また！？おい待てー！くっ、逃げられたか。仕方ない予告でもやるか。」

「霊使いと出会った次の日、

俺達はまた大神達の寮に集まっていた、

霊使い達から聞かされる他勢力の正体、

そして裏で暗躍するある組織が動き出す！

次回、遊戯王５Ｄ’ｓ　霊使いと六人の決闘者

「恐大なる勢力」

ライティングデュエル！

アクセラレーション！！

」

第六話「恐大なる勢力」（前書き）

こんにちは、作者の蟲です。

今回のお話でデュエルはしませんが、
原作でも出てきたあの男が登場します。

それでは第六話始まります！

第六話「恐大なる勢力」

刀侍視点

ピピピピピピピ
ピピピガチャ

「………ねむ、」

目覚まし時計を止め何時か見た。

「何だまだ七時じゃん今日は休日だしもうちょっと寝るか………
…………………………………………………………
…………………………………………………………
…………………………………………………………
…………………………………………………………
…………何か重い、」

俺が寝ようとすると布団の中の違和感に気付く。
布団の中の何かが乗っていて寝れねぇ、

「何が乗ってんやが………！？」

布団をめくった俺は驚愕した。
何故ならそこに居たのは…………………

「ライナぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁー！！」

そんな事により俺の眠気はふっとんだ。

鉄平視点

「あはははははははははははー！」

俺は竜から今朝の話を聞いて大笑いしていた。

「笑い事じゃねーよ。」

「あは、は、はは……ふぅー、いやー、久しぶりに笑える話だったからつい笑っちまってな悪かったな。しかし雪代、お前って奴は、ぷっ、あはははははははははー！」

「だから笑うな！！」

謝ろうとしたが思い出して笑ってしまう。

その事を刀侍に注意された。

何故、俺が笑っているのかといえば今朝、刀侍達の寮で起きた事件が原因である。

その事件の発端は昨日の夜、自己紹介が終わった後、ある問題を話し合っていた。

それというのも霊使い達の衣食住についてであった。

衣食は何も問題はなかった、衣に関してはどうやら雪代とツァンと竜が家にある子供用の服を持って来るそうだ。

食に関しては後藤さんが校長と話してなんとかすると言っていた。

問題はここからであるそれは住に関してだ。

仮にも俺達は学生である、何かあってからでは遅いのだ。

当初は遊星の親に事情を話して遊星の家に寝泊まりするというつも

りでいたがその意見は霊使い達によって却下された。
理由は、霊使い達は契約者から半径２５メートル以上は離れられないらしく遊星の家からではどう考えても離れすぎているのである。
そこから何分か考え込んでいると雪代が霊使い達の召喚される前の状態すなわち心の中にいる状態の事を思い出して利用できないかと言った。
たしかにそれなら何も問題は無い。
しかし、これもまた霊使い達に却下されてしまった。
どうやら心の中にいる状態は契約者に対し精神的疲労があるらしく多用はできないらしい。

それを聞き俺達はため息をつく。
また考え始めようとすると後藤さんが面倒臭そうに答えた。

「はぁー、だったら何も問題を起こさなきゃ何も問題は無いだろうが。」

まあたしかにそうなのだが、それじゃあ今までの話し合いは何だったのだ？
それを避けるために話し合っていたのではないのか？
そう考えるともう何も言う気にはなれなかった。
これで話し合いは終わった。

筈だった。
だがそこから雪代が中々帰ろうとはせず霊使い達に何かを話していた（吹き込んでいた）。
それで今朝の刀侍の状態になってしまったのだろう。

回想終了

「すみませんでした。」
しょんぼりしながらライナが謝っていた。
それを見た刀侍はライナを励まそうとする。
「ライナは何も気にしなくていいんだよ。」
「そうよ、何も気にしなくいいのよ。」
「あんたが言うな！」
刀侍がライナを励ましていると雪代（原因）が同じ事を言うので刀侍がツッコミをいれる。
「そもそもの原因はあんたじゃない！」
すると、ツァンが雪代に文句を言い出した。
「雪代！あんたが余計な事を言わなければライナちゃんだって落ち込まなかったのよ。」
「それに関しては謝るわ、でも、あなたが怒る理由はないんじゃないの？」
ツァンは雪代に対し文句を言うが逆に返り討ちにあってしまいたじろぐ。
「うっ、で、でも「でも、という事は理由があるのかしら？」ちくしょぉぉぉー！」
雪代の言葉にツァンは撃沈してしまった。

「さてと、終わったようだし早速始めるか。」
後藤さんがツァンと雪代のやり取りが終わった事を確認すると話し始めた。
「はい、では何から話しをしましょうか？」
そう、今日集まったのは口喧嘩をしにきたのではない今日はこれからの行動方針についてを決めるためだ。
「そうだな最初は・・・・・・そのインヴェルズとかいう奴らや他の勢力はどうやって倒すんだ？」
よくよく考えたら倒してくれと頼まれたはいいが倒し方を聞いてはいなかったな。
「あ！確かに説明していませんでしたね。倒し方はデュエルです。」
「「「「「「デュエル！？」」」」」」
「そうです、みなさんがよく知っているデュエルです！」
それを聞いて俺達は驚きを隠せない。
どこかでそんな気がしていたが、まさか本当にデュエルで決めるとは・・・・・
「あのー、続きを話してもいいでしょうか？」
「あ、ああ、構わねーよ。」
「では続きを話しますよ。」

先程話しをしていたエリアが驚いている俺達に話しを続けてよいかを聞いてきた。
その問いに刀侍が答えると続きを話し始めた。
ルールはエリアが言ったように俺達が知っているルールと変わりはなかったが、
あるところがまったく違っているものがあった。
それは、
デュエルでのダメージは現実のものとなる事だ。
ダメージと言っても普通なら死ぬ程ではないらしいが、人間には魔力があるらしくその魔力しだいではデュエルで命のやり取りしなくてはならない。
逆に魔力をコントロールできれば相手を気絶させる事でとどめる事が出来るそうだ。
「これでデュエルについての説明は終わりです。次は何について話しますか？」
「それじゃあ次は各勢力について聞かせてちょうだい。」
デュエルについての説明が終わると雪代が勢力について説明を求める。
エリアが説明を始めようとするとヒータが割り込んで来る。
「勢ｒ「勢力についてはあたしが説明するわ！」な、ヒータ！」
エリアが抗議を求めているがそれを無視して話し始める。
「勢力は昨日言ったインヴェルズ以外の幾つかの勢力について何だ

けど・・・」
「他の勢力？」
それを聞いて俺達が驚くと思っていたのかヒータが少し控えめに言ってくれた。
だが他勢力に関しては予想していたのであまり驚きはしなかった。
その反応を意外そうに思っているであろうヒータはキョトンとしていたが数秒後に我に返り話しを続ける。

「まずはジェムナイトについてかな、ジェムナイト達は宝石を核としていて宝石を力の源としているのよ。」
「宝石を？」
「そう宝石を使うらしいんだけどジェムナイト達がめったに戦わないから原理はよく分からないわ。」
「めったに戦わないってどういう事なの？」
「その理由はジェムナイトが和平を望んでいる中立の存在だからなの。」
「中立なら同盟を組む事はできないの？」
雪代がヒータの話しの中で中立という言葉に反応し疑問を投げかける。
その内容とは同盟を組む事であった、確かに同盟を組めれば戦略上有利になる筈だろう。
しかし、ヒータは難しそうな顔して答えた。
「同盟事態は簡単でも戦いに参加してくれるかは難しいと思う。」
「そうか、でも契約者がいれば戦いに参加するかは契約者しだいかもな。」
ジェムナイトに関しては結論として敵に回る可能性は低いだろう。

「次の勢力についてはそうねー、ワームは勢力の殆どが壊滅してるし、ドラグニティは昨日ちょっと説明したし……」
「はぁー、代わりに僕が説明するよ。「！ちょっとダル「魔轟神っていう奴らなんだけど。」
中々答えないヒータに代わりダルクが答えようとするとヒータが抗議する、しかし、ダルクはそれを無視する。
というかこれ、さっきも見たような気がする。

「魔轟神というのは惑星制圧を企んでいて惑星制圧のためなら手段を選ばない非情な奴らだよ。」
「まるで悪の組織を象徴しているような連中だな。」
「魔轟神は数ある勢力の中でも一、二を争う勢力だと言われているんだよ。」
「何かインヴェルズとかいう奴らよりもよっぽど厄介な連中なんじゃないか。」
「確かに普通ならそうなんだけど魔轟神は氷結界の一族という魔轟神並みの勢力と争っているんだ。」

魔轟神の勢力を聞いてインヴェルズよりも危険な勢力なのではという疑問を言う、しかし、ダルクは否定した。
答えは簡単だった、他の勢力に対抗しなくてはならないという事だった。
だがそこで新たな疑問が生まれる。
それというのも氷結界の一族という勢力についてである。

「なあ、その氷結界の一族という勢力はどういう連中なんだ？」
「ああ、氷結界について説明しようと思っていたしね、ちょうどいいから説明するよ。

氷結界の一族というのはある龍を封印している氷結界と呼ばれている物を守護する一族なんだ、魔轟神と争っている理由は魔轟神がその龍の龍の封印を解こうとしたからなんだ。」
「なあ、その龍っていうのは一体何なんだ？」

氷結界の一族の話を聞き封印の龍に少し興味を持ったのか遊星が龍について聞く。

「うーん、僕も詳しくは知らないけど封印を解かれるた龍は世界に終焉をもたらすと言われているんだ。」
「終焉！？」
「ああ、でもそれも使い方次第だろうけどね。」

ダルクの「終焉」という言葉を聞き遊星が驚く、それを見たダルクが安心させようとする。
しかし、「終焉」か・・・

その事を考えているとダルクが話しを再開する。

「こいつらが人間界に来ている可能性がある勢力かな、大丈夫？」
「あ、ああ、大丈夫だ。」
「・・・そう、じゃあ次は何を決め・・・・・・・・・・・・・・・・」

氷結界の話を聞いてから俺は話し合いに集中できなかった。

何故か氷結界という名を昔聞いた事があるような気がした。

？？？？視点

ここはあるビルの一室、
ここには数百個近くあるパソコンを何百人もの人間が操作していた。
するとそのうちの一人が驚きながら私をよんだ。

「そ、総帥、来て下さい！」
「どうした。」

私はそいつの隣に歩み寄る。

「それが・・・まずはこれを見て下さい。」
「こ、これは！？」

そいつが見せた物に私は驚きの声を上げる。
それはデュエルアカデミアの周辺の地図だった。
だがその地図にはある数値が異常な値を出していたのだ。

「なんだ！この精霊力の異常な値は！？
機械の故障ではないのか？」
「いえ、私もそう思い確認しましたが、故障ではないようなのです。
」
「くっ、ならば早速調査を始める。
まずは確認のため数人現地に向かわせる。
セリア、お前はそいつらを選抜しろ。」
「はっ！」
「ん？忘れるところだった、セリア！こいつは必ず選抜メンバーに
加えろ。」

そう言うと私はセリアに資料を渡す。

「な！彼女を加えるんのですか！？」
「何か問題があるか？」
「ッ！？い、いえ、何も問題ありません・・・・」
「だったらさっさと始めろ。」
「はっ！」

そう言い私は自身のオフィスに行く。

ふっふっふっふっふっ
やっと俺の野望への１ページが始められる！
やっとこの俺、

ディヴァインの野望がな！！

第六話「恐大なる勢力」（後書き）

今回の後書きは予告ではなく。

作者のデッキ紹介コーナー！

と言っても興味はあまりないでしょうが。

そんな事には負けず紹介していこうと思います。

まとめるとこんな感じ

「六武衆」

「スカーレッド・インフェルニティ」

「極星」

「古代の機械」

「ジャンクフェザー」

「サイドラ」

「鎧黒竜の渓谷」

「魔轟神」

と言った感じです。

ジャンクフェザーというのはＢＦにジャンク混ぜただけで、

鎧黒竜の渓谷はドラグニティに裏サイバーを混ぜたという単純なデッキ、

スカーレッド・インフェルニティはレッドデーモンズをインフェルニティの展開力を駆使して速攻で出しインフェルニティ・ジェネラルの効果で墓地からビートルを二体を特殊召喚しスカーレッドをこれまた速攻で出すデッキ。

まあ、一番強いのは六武衆なんですがね。

デュエルで大体使用するデッキは鎧黒竜の渓谷ですね。
あれは単純に強い。

まあ、読んでいる方々も飽きてくるのでこのへんで終了、という事で。

それでは次回をお楽しみに！

第七話「アルカディアムーブメント」（前書き）

どうも作者の蟲です。
今回の作品も人に誇れるような文章ではありません。
ですが、この文章を楽しんでいる人も多分いるかもしれないので、
まだまだ書いていきます！

第七話「アルカディアムーブメント」

鉄平視点

「ふぅ、やっと終わったぜ。」

歩きながらそう呟くと雪代が笑いながら話し掛けてくる。

「フフフ、そんなに疲れたのかしら？」

「そりゃそうだろ、この前にやった議題をやった後に更に新しい議題をやらせられたんたぜ。

そんだけやらされりゃ疲れるぜ。」

「たしかに今回の議題はいつも以上に多かったわね。」

「たくよー、一気にやろうなんざ効率が悪くなるだけだってのによ。」

「今度、会長に言っておくわ。」

「おっ、頼むぜ。」

「マスター、予定よりもだいぶ遅れましたけど、急がなくても大丈夫なんですか？」

雪代と話しているとアウスが話し掛けてくる。

アウスが心配している事とは今日行われるキングのデュエルをカードショップの大モニターで見る約束に遅れている事である。

「ああ大丈夫だ、少し遅れると言っておいたらな、まあ、キングのデュエルが見れねーのが残念だけどな。

つーか、それって本当にすげーな。」

「？」

俺はアウスに心配は無い事を伝えると、アウスの姿を見ながら驚く。
「俺達のような契約者には普通に見えているのに他の奴らには見えねー事だよ。」
「それはですね。
今朝、マスターにも説明したようにこれは自身に魔力を纏う事により魔力が強い人やマスターのような契約者以外には視認する事を不可能にするんです。」
「それは理解したけど、もし魔力が高い人間がいたらまずいんじゃないかしら。」

俺の質問にアウスが答えてくれた。
すると話しを聞いていた雪代がアウスの言った事に対し質問する。

「たしかに魔力が高い奴がいたら色々と厄介だしな、アウスよ、そこんところはどうすんだ？」
「それなら多分、大丈夫だと思いますよ。
魔力が高い人やマスター達のような契約者はそうそういない筈です。」
「そういうものなのか。」
「そういうものなんですよ、マスター。」
「なあアウス、一つ提案していいか。」
「なんですか？」

アウスの説明を聞き納得していると俺はアウスの言葉に違和感がある事に気付きある提案をした。

「マスターって呼ぶの止めてくれねーか。」
「え！どうしてですか！？」
「何かかしこまってるのが嫌でな。」

「別にかしこまってつもりじゃないけど。」
「自分自身じゃ気付いてないだけだ。」
「そうね、確かにアウス、あなたは遠慮している節があるわね。」
「ですが、礼節は大事にしろと言われていますし。」
「確かに礼節は大事よ、でもね、私達はこれから共に戦うのよ。
アウス、あなたは名前を呼び合えな相手に命を預けて戦えるのかしら？」
「そ、それは、」
俺と雪代はアウスを説得しようとするが、アウスは頑固なのか説得に応じない。
「そういえば、他の奴らは名前を呼ぶどころか呼び捨てにしてる奴もいるぜ。」
「！！」
アウスは俺が言った言葉に驚く。
そんなアウスをよそに俺は言葉を続ける。
「それによ、俺がアウスに名前を呼んでほしいんだ。」
「ッ！？」
俺の言葉を聞いてなぜか頬を赤く染まっていたがどうしたのだろうか、何か雪代とエリアは俺を見て朴念仁とか言い出すし訳が分からん。
こういう時は無視して話しを続けるのが一番だ。
無視、無視、
「それで答えは。」
「は、はい、えーっと「鉄平でいいぜ。」え。」

「だからよ、鉄平でいいって言ってんだよ。」

俺がアウスに頼むと了承してくれたがどう呼べばいいのか悩んでいる。

それを見て俺は鉄平でいいと答えた。

そして

「はい！鉄平。」

その後、俺達は笑いながら歩き始めた。

これから始まる事を全く予測できずに。

雪代視点

アウスを説得し私達はカードショップに向かおうとした時、突然後ろから声をかけられた。

「そこの君達、ちょっといいかね？」

声がした方向に振り返ると、そこには眼鏡をかけている青年と眼鏡の青年と同じ服を着た少しガラの悪そうな青年が立っていた。

「ええ、大丈夫ですが。」

「それはありがとう。

道を聞きたいのだが、デュエルアカデミアへはどう行けばいいのでしょうか？」

眼鏡の青年が道を尋ねてきたのでデュエルアカデミアまでの道を説

明する。
私が説明をしていると鉄平がなぜか彼らに対し警戒していた。
嫉妬？いや、おそらく違うわね、朴念仁の意味すら知らなかったし。

「、というように行けば着くはずよ。」
「分かりました。ありがとうございます。」
「これぐらいの事で礼は要りません。」
「いえ、礼はしなくては、そうですね、企業秘密なのですが私達がデュエルアカデミアへ行く理由をお教えしましょう。」

私は眼鏡の青年の言葉に疑問と興味を抱く、
企業秘密、
そして企業秘密なのに教えようとする事、
この二つがどこか引っかかり、
疑問から興味に変化した。

「それはぜひ聞きたいわね。」
「そうですか、それは良かった。
では、青木(あおき)くん、説明してくれ。」
「何で俺が内海(うつみ)さんでもない、あんたに命令されなきゃならねーんだよ！」
「たしか来る前に言った筈だ、私は今回の件に関して全権を任されているとな。
それ以上無駄口をたたくというのなら帰ってくれてもかまわないが。」
「ちっ、分かりました！黒崎(くろさき)さんよ！」

黒崎（眼鏡の青年）が青木（ガラの悪い青年）に命令した。
青木が命令された事が勘にさわったのだろう黒崎に対し反抗的な態度をとる。

そんな青木に、黒崎は知らんと言わんばかりの態度で圧力をかける。
その圧力に負けたのか舌打ちをした後に説明を始めた。

しかし、内海とは彼らの上司なのだろうか？
この黒崎という男が誰かの下につくとは思えない。

「あのー、話を始めていいすか？」
「え、あ、お願いします。」

考えを巡らせていると青木が説明を始めたいのか話しかけてくる。
私がそれに答えると青木が話し始めた。

「俺達がデュエルアカデミアに行く理由を聞いても笑わないで下さいよ。」
「それってどいう事かしら？」
「えーと、その、あー、」
「ええい、まどろっこしい！お前には任せてられん、俺が説明する！」
「だったら最初からそうしてくれよな。」
「何か言ったか。」
「いいえ何も言ってません。」

青木がどう説明するか考えていると黒崎がイライラしていたのか、
怒りにまかせ言葉を発し説明役を変わる。

「私達は精霊について調べているんですよ。」
「精霊！？」

黒崎の言葉に私達は動揺してしまう。
嫌な予感がした。

「おや？笑われるかと思ったのですが、
いやはや、そのような反応をしたのはあなた方が初めてですね。何か知っているのですかな。」
「いえ、少し驚いただけです。」

黒崎が私達の反応を見て不審がって聞いてくる。
否、この男は不審がっているのではない、
この状況を楽しんでいる。

ふふふ、私に対してそんな事をするなんて言い度胸じゃない。

「では説明を再開しましょう。」
「ええ、どうぞ。」
「今回デュエルアカデミアへ来たのも精霊が関係していてね、何か知っているのだったら嘘偽り無く教えてほしいんだが。」
「もし、嘘を言ったらどうなるんだ。」

黒崎が話しの本題であろう事を口にする。
すると、今まで警戒していて沈黙を守っていた鉄平が質問する。

「もしも嘘を言えばただではおかないとだけ言っておこう。」
「！」

恐らくこちらが警戒している事に気付いていたのだろう脅しをかけてきた。

「いいや、俺達は知らねーぜ。」

彼らの脅しに対し鉄平が嘘をつく。

先程のアウス達の話しからすれば、私達が冷静に対応していれば嘘を見破られる可能性は低い。
しかし、黒崎の次の言葉に私達は驚く。

「そうか、協力してくれないとはとても残念だ。
状況が状況だ少々暴力的だが仕方がないな、
その精霊達は奪わせてもらう。
青木、責任は俺がとる、存分に暴れろ。」
「へっ、そりゃありがてー。」
「雪代！そいつ等から離れろ！！」

黒崎がこの話しを終わらせようとする、
その中でこいつ等が精霊が見えていた事が判明して、こいつが最初から全て知っていた事が分かった。
このへたれ眼鏡め。

私がへたれ眼鏡をどうしてくれようか考えていると、突然鉄平が声を張り上げて離れるように言った。
その声を聞き反射的に距離をとる。

「ほう、中々勘がさえているじゃないか。」
「そりゃどーも、だけどよ今回はてめー等の事を思い出したんだよ。」
「思い出した、だと？」
「そうだ、雪代こいつ等が着ている服はアルカディアムーブメントっう会社が着用している服だ。」
「アルカディアムーブメント？確かサイコデュエリストのような特異な能力を持つ人の治療法を探している会社のはずよね？」
「表向きはな、裏じゃ、そういうサイコデュエリストを戦争に利用しているサイコデュエリストと屑野郎共の集まりさ。」

アルカディアムーブメントが裏で傭兵派遣会社の真似事をしていたなんて。
ていうか、屑野郎って中々合ってるじゃない。

「おやおや、屑野郎とは非道いじゃないか。
そういう子供（ガキ）にはお仕置きが必要だな。」
「お仕置きが必要なのはどっちかしら？
あなたは私が直々に天罰を下してあげるわ。」
「ほう、それは楽しみだな。」
「ふふふ、あなたはいつまでそう強気でいられるかしら。」
「はぁー、矢っ張りこうなったか。」
「お前が相手か。」
「ん？ああ、そういう事になるな。」
「だったら、とっとと始めようぜ。」
「ちっ、面倒くせー事になりやがったな。」

そして私達はデュエルディスクを起動させる。
そして高らかに宣言する。

「「「「決闘（デュエル）！！」」」」

第七話「アルカディアムーブメント」（後書き）

今回はデュエルをやりそうなところで終わってしまいました。
次のお話は鉄平達から刀侍達にいきなり移します。
なので恐らくデュエルは無い筈です。
作者的にはそろそろ書こうと考えているので後、二～三話くらいにはデュエルを挟みます。

それと、作者は最近、遊戯王ＧＸにはまっています。
なので近々、遊戯王５Ｄ’ｓよりも前のキャラからもじってだしたいなー、とか考えてます。

では次回をお楽しみに！

第八話「宣戦布告」（前書き）

今回はだいぶ遅れてしまいました。
しかも今回もデュエルが無い。

これはまずい。
遊戯王なのに・・・・

第八話「宣戦布告」

遊星視点

『今回の勝者もやはりキングだぁー！』

モニターから聞こえた声に周りが歓声を上がった。

「さすがキングだな。」

俺はカードショップ二階のデュエルスペースにあるモニターから流れてくる解説の声を聞きそう呟く。
今日はキングのデュエルを見るためカードショップに集まる予定だったが、鉄平と雪代が遅れるため俺、刀侍、竜、ツァンで先に来たのだ。
ちなみに竜とツァンはウィン達と一緒にカードを見ている。
俺の呟きを聞いていたのか、隣にいる刀侍が話しかけてくる。

「確かに無敗の巨人と言われてるボマーに対してもいつも通りの戦略で挑んで正々堂々と勝つなんてな。」
「それだけじゃない、Dホイールのテクニックも見習うべきところが合ったしな。」
「ああ、そうだな。」
「ようお前ら！中々勉強熱心じゃないか。」

キングのデュエルを刀侍と共に語り合っていると誰かが煙草を吹かしながら話しに割って入ってくる。
彼の名前は村雨宗次郎（むらさめそうじろう）、元々セキュリティーだったが辞めて現在はこのカードショップの店員だ。

「それでお前らは活かせるものは見つかったか？」
「ああ、キングのデュエルを見て色々と思いつくものがあった。」
「ほぉー、そりゃ何を思いついたんだ？　」
「それは見てからのお楽しみだ。」

俺は宗次郎にそう言うと宗次郎は楽しみにしていると言った。
そんな会話をしていると刀侍が宗次郎の顔をじぃーっと見ている事に宗次郎が気付く。

「刀侍、最初に言っておくが俺にはそっちの趣味はないぞ。」
「ちげーよ！何とんでもない勘違いしてんだ、俺にそんな性癖はねーよ！」
「じゃあ、何なんだ。」
「あんたが口にくわえている煙草だよ。」
「煙草がどうかしたのか？」
「どうかしたのか、じゃねーよ。
ここに禁煙って書いてんだろーが！」

そう言って刀侍は壁に貼ってある
「☆デュエルスペースでの規則☆」と書いてある紙の「第四条」というところを指を差した。
そこには禁煙と書かれていた。

「そんな事か。」
「店員が決まりを破っていいのかよ。」
「良いんだよ、どうせ電子タバコなんだし。」
「電子タバコでも紫音さんにバレたら不味いんじゃないか。」
「紫音なら一階で仕事をしてっから二階には来ないさ、
第一バレなきゃいいんだよ、バレなきゃ。」

「そうだな、確かにバレなければ分からないからな、宗兄。」
「そうそうバレなければって、紫音!?
一階で仕事をしてるんじゃなかったのか?」

宗次郎が調子に乗っていると宗次郎の後ろから声が聞こえた。
その声に宗次郎が驚いて一歩下がると後ろからツァンと同じくらいの身長の女性が現れた。
女性の名前は村雨紫音、彼女は宗次郎の妹でこのカードショップの店長をやっている。
こちらに気付いたのか「よう。」と声をかけると宗次郎と話を再開する。

「宗兄が仕事をほっぽりだしていなくなるから深井に任せて探しに来たんだよ。
それで二階をに向かったら案の定ここで煙草吹かしてサボっている宗兄を見つけたってわけさ。」
「そりゃ、ご苦労なこって。」
「まったくだぜ、で、どうだったんだお前ら。」

紫音が自身の苦労?を言い終わると俺達の方を向き話しかけてくる。
しかし、言っている事がよく分からないのか刀侍が聞き返す。

「何が?」
「何って、キングとボマーのデュエルに決まってるだろ。」
「ああ、今回もキングの勝ちだ。」
「ふーん、また勝ったのか。」
「なんだよ、その反応はまるで負けるとか思ってたみたいだな。」
「いや、そんな事は微塵も思っちゃいないぜ。予想通りで拍子抜けただけだよ。」
「微塵もって、まるでボマーが弱いみたいに言っているように聞こ

えぜ。」
「別に、ただ・・・」
「ただ？」
「キングからすれば弱いんじゃないか。」
「え？」

その言葉を聞き俺達は沈黙する。
俺達が黙っていると竜達が階段から上がってきた。
竜が村雨兄弟に気付いて挨拶をした。

「お久しぶりです、宗次郎さんに紫音さん。」
「おう、久しぶりだな、ん？」

竜が挨拶をすると紫音が挨拶を返す。
すると紫音が何かに驚いたような顔をする。
竜の方を見た宗次郎も同じ反応をした。
その反応に竜が動揺する。

「どうしたんですか？」
「どうした、はこっちのセリフだ。」
「へ？」
「一体その子供達は誰だ。」
「「「「！？」」」」

宗次郎が電子タバコを指で挟み、ウィン達に喋りながら向ける。
その事に俺達は驚く。
何故、魔法がかかっているウィン達が見えているのか分からない。
幸いにも村雨兄弟以外は見えていない。
では、村雨兄弟だけはどうして見えているんだ？

ドガァァァァァン

考えを巡らせていると一階から轟音が響き二階にいる全員が驚く。
村雨兄弟が素早く一階に走り出す、俺達も数秒遅れて走り出した。
俺達が階段から一階に着いたときには一階は爆弾が爆発したような状態になっていた。

「宗次郎さん！紫音さん！」

ツァンが店内の中心に立っていた村雨兄弟を見つける。
だがツァンの声が聞こえていないのか村雨兄弟は無視して自動ドアの前に立っている六人組を睨みつけている。

「お前らは来るな！こいつらはサイコデュエリストだ！」
「サイコデュエリスト！？」

サイコデュエリストの事は牛尾から聞いていたが一撃でここまでとは恐ろしい。

しかし、どうして宗次郎はサイコデュエリストを知っていたんだ？
色々と疑問はあるが今は目の前で起こっている現実に思考を集中しなくては、
すると、宗次郎が連中の中心（サイコデュエリスト）にいる仮面の女性に話しかける。

「お前達の目的はいったいなんなんだ？」
「あなた達二人には用はない、私達が用があるのはあなた達の後ろにいる精霊の契約者達だけよ。
だから、あなた達はそこをどきなさい。」
「契約者？ああ、刀侍達の事か。
そうか、やはりこいつらは契約者になったか、
それなら尚更、退くわけにはいかんな。」
「そう、なら仕方がないわね。
そこの二人、彼らの相手をして時間を稼ぎなさい。」
「「はっ！」」
「お前ら！早く此処から逃げるんだ！」
「逃がさない。」
「行かせるもの、何！？」
「よそ見は禁物だ、あなたの相手は私なのだから。」
「くっ、紫音！」
「こっちも、こいつの相手で忙しい！」

宗次郎が仮面の女性を止めようとするが先程の二人に阻まれてしまう。
宗次郎に従い俺達は逃げようとするが仮面の女性に回り込まれてしまった。
それに続くように他の三人が周りを取り囲む。

「精霊さえ渡せば手荒なまねはしないわ。」
「俺達が抵抗したら？」

「その時は覚悟してもらうわ。」
その言葉を聞き俺達は沈黙してしまう。
だがその沈黙も刀侍によって終わる。
「なあ、一つ質問していいか？」
「ええ、構わないわ。」
「お前らはライナ達を捕まえてどうするつもりだ？」
刀侍は連中から目的を聞き出そうとした仮面の女性に質問する。
だが、答えを言ったのは仮面の女性ではなく、その右隣にいる男だった。
「精霊世界へ行くための実験につかうんだよ。」
その言葉に刀侍は怒りを露わにしそうになるがいま一歩の所で押さえ込む。
怖がっているライナを刀侍は笑顔で頭を撫でた。
だが、刀侍の怒りに気付いていないのか男は話を再開する。
「そして我々は精霊世界へ行き、精霊達を我等アルカディアムーブメントの支配下に置き全世界を掌握するのだ！！
どうだ素晴らしいだろう？
分かったらさっさとそこの実験体となる精霊を渡せ！」
ブチッ
その男が喋り終わった瞬間、刀侍からそんな鈍い音がはっきりと聞こえた。
その音は男にも聞こえたらしく刀侍の方向を恐る恐る見る、

男は刀侍を見た瞬間、素っ頓狂な声を上げ床にしりもちをつく。
それもそうだろう、刀侍は間違いなく本気で怒っているのだから。
刀侍以外の俺達も今の言動には怒りを感じているが刀侍の怒りは俺達の比ではないだろう。
そして刀侍は俺達の代わりに宣言する。

「てめぇらは、俺達がぶっ潰す！！」

俺達はアルカディアムーブメントに宣戦布告した。

第八話「宣戦布告」（後書き）

実は今回の話しでデュエルをさせるつもりでしたが、
宣戦布告の件をいれたら終わり方でデュエルできないじゃん！という事になり急遽変更。

そして今の話しになりました。

デュエルに関しては次では必ず書く気でいます。

ですが、駄文は変わらないわけでして・・・・

まあ、気を取り直して次回のデュエルは、

『遊星ｖｓ謎の仮面の女性』

仮面の女性は誰だか分かりますよね？

第九話「黒薔薇の魔女」（前書き）

今回の話は後半にちょっとだけデュエルがあります。

テスト期間なので次回は遅れると思います。

と言っても次回は短めに書く予定なので書けるかもしれませんか・・・

第九話「黒薔薇の魔女」

鉄平視点

「モンスターで直接攻撃！」
「うお！？」
青木（あおき）　智也（ともや）
ＬＰ０

直接攻撃を仕掛け青木にとどめを刺す。
すると隣で雪代もデュエルを終わらす。

「モンスターでとどめ！」
「ぐっ！」
「ふー、どうやらあっちも終わったようだな。」

雪代がデュエルを終えてこちらに歩み寄って来る。
歩み寄って来る雪代に俺は無事かを確かめる。

「雪代！大丈夫か！」
「ええ、ルーンの瞳のおかげで無事よ、そっちは？」
「こっちはアウスのおかげで軽い傷ですんだ。」
「そうそれは良かったわ、さてあなた達はセキュリティに突き出して色々と聞かせてもらおうかしら。」
「・・・フッフッフッフッフッ、」
「何を笑ってるのかしら。」

雪代が黒崎に対し脅しをかけるが、黒崎はいかなり笑いだした。

その事に雪代は少し動揺したが直ぐに冷静さを取り戻し黒崎を問いただす。

「確かにお前達は私達に勝ったな、
だが私達は陽動だ。」
「何！？」
「お前達が契約者の中でも特に手強いと聞いていてな。」
「ちっ、こっちの情報は漏れてやがるって事かよ。」
「まあ、そういう事だ。
さて、」

どうやら俺達の情報が漏れているようで連中は俺と雪代が刀侍達と離れる会議の時を狙ってきたのだろう。
そして黒崎は話し始めた。

「君達はこんな所に居ていいのかな？」
「！？てめぇらとことん屑野郎だな。」
「負け犬の遠吠えにしか聞こえんな。」

俺達は敗北した。
雪代も分かっているのか悔しそうな表情を浮かべていた。
こいつらをセキュリティに突き出すにはセキュリティが来るまで俺達が此処にいなくてはならい。
しかし、それは刀侍達を助けにいけなくなるという事だ、だが俺達には選択肢はないだろう。
俺達が行かなければライナ達の誰か一人は助からない可能性が高い。
最初から俺達の選択肢は一つしかないのだ。

「行くぞ、雪代。」
「分かったわ。」

そして俺達はその場をあとにした。

遊星視点

「私達を潰す？」

刀侍の宣戦布告を聞き仮面の女性が聞き返してくる。
恐らく女性は刀侍の言った事が理解出来ていないのだろう、数秒の沈黙の後に理解出来たらしく小さく笑う。

「クスッ、私達を潰すなんてそんな冗談で笑わないでくれるかしら。」

「冗談？何を言ってやがる俺は本気だ！！」

刀侍の言葉に反応して仮面の女性が刀侍に対し殺気を飛ばす。

それに負けじと刀侍は仮面の女性を睨み付け、正に一触即発の事態となっていた。
すると先程のサイコデュエリストが話し始めた。
「さっさと始めたらどうだ？黒薔薇の魔女。」
「黒薔薇の魔女！？」
そのサイコデュエリストが言った名前に竜が驚く。
「知ってるのか、竜。」
「ああ、黒薔薇の魔女は最近ダイモンエリアに現れるては破壊活動を行っている奴だよ。」
「詳しいな。」
「今日、電話で親父から聞いてね。
あれ確か刀侍に話した時、みんなに伝えるって言ってたよね？」
「あ、伝え忘れてたわ。」
「はぁ～、やっぱり。」
竜と刀侍のやり取りに俺達は苦笑する。
だがこれ以上は待てないと左奥にいた赤い仮面を付けたスーツ姿の青年が言い出した。
「そろそろ始めないか？
我々は急いでるのだが。」
「あんたら勝手にきといて、そりゃあねーんじゃねーのか。」
「それもそうか、謝罪させていただこう。」
「今更、紳士ぶってんじゃねーよ。」
「はっ！言われてるぞ才蔵（さいぞう）。」
「ふっ、だからどうした、小僧の言葉を鵜呑みにするとはまぬけめ。
」

「何！」
「そのへんにしておけ才蔵。」
「すまぬ、国立殿。」
「気にする事はない。」

才蔵という男が言い争っているのをみかねて国立と呼ばれた男が止めに入る。
すると言い争っていた二人は大人しくなる。

「さて、童共よ覚悟はよいか。」
「！？」

国立のその言葉に俺達は気圧され金縛りにかかったように動けなくなる。
国立はその年からは考えらんない力強さを感じる。
しかし、刀侍はただ圧せられるのは性に合わないらしく叫びで気合いで押し返そうとする。

「動きやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」
「ん？」

刀侍の叫びに反応し国立が神妙な顔で刀侍を見る。
刀侍は気合いをとめどなく出し続ける。
そして、

「おっらあぁ！！」
「何！？国立殿の金縛りが！」
「・・・フッ、ヌハハハハハハハハー！」
「国立殿？」
「中々面白いではないか童よ。」

「童じゃねー、俺の名前は大神刀侍だ！」
「む？そうか刀侍か、魔女よ奴は儂が相手をさせてもらうがよいかな？」
「国立さんがそうしたいなら構わないわ。」
国立の要望を仮面の女性は許可する。
「なら、俺はそこの女の相手をするぜ。」
「げっ、よりによってあんたが相手なの。」
刀侍に馬鹿にされた男がツァンに指をさす。
「では貴様の相手は俺というわけか。」
「僕以外にもう一人いるけど。」
「ああ、奴は魔女が御所望でな。」
「それはどういう事だ？」
「知らんな、奴の心など俺には到底理解できん。
まあ、理解する気もないがな。」
才蔵と竜が話しているところを見ると消去法で俺の相手が決まる。
その相手は、
「あなたの相手は私。」
「黒薔薇の魔女・・・」
そして全員の相手が決まり各々がデュエルディスクを起動させデュエルの用意をする。
「それじゃあ、始めようかしら。」
「ああ、」

「「決闘（デュエル）！！」」

「先攻は私が貰うわ、ドロー。」

黒薔薇の魔女
ＬＰ４０００
手札５→６
伏せカード無し

不動　遊星
ＬＰ４０００
手札５
伏せカード無し

「私はモンスターを裏側守備表示で召喚、
そしてカードを二枚セットしてターンエンド。」

「俺のターン！ドロー。」

不動　遊星
ＬＰ４０００
手札５→６
伏せカード無し

「俺は手札からおろかな埋葬を発動しボルト・ヘッジホッグを墓地に送る。
そして俺は手札からチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚！」

ボルト・ヘッジホッグ

レベル２・地属性・機械族
ＡＴＫ／８００
ＤＥＦ／８００
自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

ジャンク・シンクロン
レベル３・闇属性・戦士族・チューナー
ＡＴＫ／１３００
ＤＥＦ／５００
このカードの召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「ジャンク・シンクロンの効果発動、このモンスターの召喚に成功した時、墓地のレベル２以下のモンスターを効果を無効にし表側守備表示で特殊召喚する事できる。
俺は墓地からボルト・ヘッジホッグを召喚しレベル２ボルト・ヘッジホッグにレベル３ジャンク・シンクロンをチューニング！」
「１ターンで・・・・！？」
「集いし星が新たな力を呼び起こす、光さす道となれ、シンクロ召喚！
出でよ、ジャンク・ウォリアー！」

ジャンク・ウォリアー
レベル５・闇属性・戦士族・シンクロ
ＡＴＫ／２３００
ＤＥＦ／１３００
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル２以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

俺の場に蒼き戦士が現れた。

「行くぞ！ジャンク・ウォリアーで裏側守備表示モンスターに攻撃、叩き込めジャンク・ウォリアー、スクラップ・フィスト！」

「くっ、破壊されたモンスター、プチトマボーの効果発動、このモンスターが戦闘によって破壊された時にデッキからトマボーと名のついたモンスターを２体まで特殊召喚する事ができる。私はプチトマボーとトマボーを特殊召喚する。」

プチトマボー
レベル２・闇属性・植物族・チューナー
ＡＴＫ／７００
ＤＥＦ／４００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「トマボー」と名のついたモンスターを２体まで特殊召喚する事できる。この効果で特殊召喚したモンスターは、このターンシンクロ素材とする事はできない。

トマボー
レベル３・闇属性・植物族
ＡＴＫ／１４００
ＤＥＦ／８００
フィールド上に表側表示で存在するこのカード以外の植物族モンスター１体が相手の魔法・罠カードの効果の対象になった時に発動する事ができる。自分フィールド上に存在するこのカードをリリースする事で、自分のデッキからカードを２枚ドローする。

相手の場にトマトのようなモンスターが2体現れた。
「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ。」
「私のターン、ドロー。」

黒薔薇の魔女
ＬＰ４０００
手札３→４
モンスターゾーン×２
魔法・罠ゾーン×２

「私はフェニキシアン・シードを攻撃表示で召喚。」

フェニキシアン・シード
レベル３・炎属性・植物族
ＡＴＫ／８００
ＤＥＦ／０
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送って発動する。自分の手札から「フェニキシアン・クラスター・アマリリス」１体を特殊召喚する。

「私はレベル２フェニキシアン・シードとレベル３トマボーにレベル２プチトマボーをチューニング。
冷たい炎が世界の全てを包み込む、漆黒の花よ開け、シンクロ召喚！
咲き乱れよ、ブラック・ローズ・ドラゴン！」

ブラック・ローズ・ドラゴン
レベル７・炎属性・ドラゴン族・シンクロ
ＡＴＫ／２４００

ＤＥＦ／１８００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。１ターンに１度、自分の墓地に存在する植物モンスター１体をゲームから除外する事で相手フィールド上に存在する守備表示モンスター１体を攻撃表示にし、このターンのエンドフェイズまでその攻撃力を０にする。

「馬鹿な、ブラック・ローズ・ドラゴンだと！？」
「何を驚いているの？」

俺はブラック・ローズ・ドラゴンが出てきて驚愕した。
何故ならそれは、

「それは、そのカードは親父がモーメントの制御キーとしたこの地球上に一枚しかないカード。
そしてその一枚は俺がある友人が転校する時に絆の証として渡したカードだ。」

俺はその事を仮面の女性に伝え、ある名前を口にする。

「お前はアキなのか、十六夜アキなのか…」

第九話「黒薔薇の魔女」（後書き）

次回で刀侍達とアルカディアムーブメントとの初戦は終わります。

今回のお話は遊星のお話にするつもりでしたがだいぶ違う感じになってしまいました。

そろそろ前回の話で出したキングを出そうと考えています。

ちなみに元キングでレモン使いの人ではありませんよ。

では次回もお楽しみに！

第十話「黒薔薇の魔女の正体」（前書き）

後期中間考査が終わった～
でも点数が悲しいことに（泣）
だが挫けずに書いていきます！

第十話「黒薔薇の魔女の正体」

刀侍視点

「ブラック・ローズ・ドラゴン……！？」

俺は遊星の対戦相手のフィールド上に出たモンスターにくぎ付けになる。

あのカードは遊星が十六夜に渡した筈だ、
何故、黒薔薇の魔女が持っているんだ。

十六夜が誰かに渡したのか？
いや、そんな筈は無い。
あいつが誰かに思い出が詰まったカードを渡す訳がない。

では誰かに盗まれたのか？
それも違うな。
あの親のことだすぐにでも盗難届を出すだろう。
そうなれば世界に一枚しかないカードが盗まれたとニュースになる筈。

俺は様々な考えからある答えを導き出した。
否、この答えは最初に出ていたが眼を背けていた答え。
それは、
黒薔薇の魔女の正体が
十六夜アキだという事。

そんな事は信じたくはなかった、
だが、いくら考えてもそれ以外の答えが浮かばなかった。
「余所見をしている余裕があるとは楽しませてくれるわ。」
「！」

そうだ、
俺はこの爺さんとデュエルをしているのだ。
彼女の事は遊星に任せて俺はデュエルに集中しよう。
「余所見して悪かったな爺さん、
デュエルを再開しようぜ！」
そして俺はデュエルを再開した。

遊星視点
「答えてくれ、お前はアキなのか！」

俺は彼女（黒薔薇の魔女）を問い詰めた。
その言葉を聞いた彼女は驚きの声を上げる。
「！？あなたが何故、私の名前を知っているの、」
「やはりアキなのか、俺だ不動遊星だ！」
彼女の正体が十六夜アキだという事が分かったがアキは俺に逆に問い詰めてきた。
「……知らない、知らない、知らない知らない知らない知らない、私はそんな人は知らない！！」
「！？」
「し、らない、！がぁ…あぁ……ああッ、」
「アキ！」
アキが知らないと言い続けているとアキがいきなり頭を抱え苦痛の声を上げる。
俺はデュエルを中断してアキの元に駆け寄ろうと走りだした。
だが、
「遊星さん、危ない！」
突然、ウィンが前に出て来て危険を促した。
次の瞬間、いきなり現れた何かがウィンに体当たりを仕掛けてきた。
だがその何かはウィンの前で壁に当たったように後方に跳ね返された。
その何かはまるでテントウ虫のような姿をしていた。
「おやおや、こいつを吹き飛ばすなんて見かけによらず君やるねー。」

俺達は突然、声が聞こえた方向に視線を移した。
そこには眼鏡をかけ、この場に似合わないようなヘラヘラした顔をしている優男がいた。
男は苦しんでいるアキに近づきポケットから注射器を出しそれをアキの首に打った。
注射器を打たれたアキは倒れた。

「アキ！貴様一体アキに何をしたんだ！」
「そう怒らないでくれよ、私は彼女にちょっと眠ってもらいたいだけですから。」

男の口振りから打ったのはどうやら睡眠薬のようだ、
それを聞いた俺は安心する。
しかし奴は何者なんだ、そんな事を考えていると男が話し始めた。

「申し遅れました、私はアルカディアムーブメントの内海と申します。」

その自己紹介を聞いて身構える。

「そんなに身構えなくてもいいよ、私は君達と争う気はないから。」
「なんだと？」
「今回の作戦は失敗したからね。」

失敗？これのどこが失敗なんだ。
周りを見てそんな事を考えている俺に内海は話を続ける。

「なので今回は潔く退かせてもらう事にしたんだよ。」
「待て！」

「待てと言われて素直に待つ人なん「逃がさん！」ん？」

俺が内海を止めようとするが内海は軽々と避けられてしまう。
そして内海がヘラヘラしながら逃げ始めようとした時、俺の隣を何かが横切り内海の元まで駆けた。

「宗次郎！」

俺を横切ったのは宗次郎だった！
宗次郎は内海の前まで駆けるとその勢いで内海の顔面に蹴りを放った。

ドンッ！！

そんな鈍い音が聞こえ宗次郎の蹴りが当たったかに思われた。

「元と言えどセキュリティの有能な捜査官か、流石と言っておくか。だが、」

当たったかに思われた宗次郎の蹴りは突然、宗次郎の目の前に現れた赤い仮面の男、才蔵によって止められていた。
才蔵は宗次郎の足を跳ね返し勢い良く宗次郎を蹴り飛ばす。
宗次郎は一瞬、動揺したが直ぐに意識を才蔵に集中したため才蔵の反撃に反応しカードが出来たようだ。

「御主は出ない筈ではなかったか？」
「いえいえ、状況が状況ですので。」

内海がそう言うと才蔵が内海に抱えられているアキに邪魔者めという視線を向けて呟く。

「そんな邪魔者など切り捨てればよかろう。」
その言葉に俺はぞっとした。
今あいつは仲間を見捨てればいいと言ったのか？
「ふっ、まあ良いだろう。
内海よ、さっさと退くとしよう。」
「そうですね、セキュリティに来られては厄介ですからね。」
そう言うと撤退の準備を始めようとする。
そんな奴らに宗次郎はくってかかる。
「逃がさんと言った筈だ！」
そう言うと宗次郎は駆け出す。
「いや、今回は逃がしてもらうぞ。内海！」
「罠発動、閃光弾。」
「くっ！？」
内海がデュエルディスクにカードをセットして発動した瞬間、周りに大きな音と真っ白な世界が広がった。
そして俺達が気付いた時にはサイコデュエリスト達は姿は消えていた。

第十話「黒薔薇の魔女の正体」（後書き）

今回の話はデュエルどころか肉弾戦でした。
（遊戯王で肉弾戦て）

最近はＴＧデッキを作ろうとしていますが中々、軸になるモンスターがあたらない。

次の話はサイコデュエリスト達の襲撃から少し前の話です。
それもキングの話です。

やっとキングの正体が分かります。

第十一話「白龍の契約者と雷の名を持つ者」（前書き）

今回は刀侍達ではなく

キング視点でお送りします。

やっとアイツを出せるぜ！

第十一話「白龍の契約者と雷の名を持つ者」

？？？？視点

『今回の勝者もやはりキングだぁー！』

「ふっ、それは当然たろうな。」

周りの歓声を聞きながら私は呟く。

あいつがボマーに敗れる可能性など１０％満たないからな。

「しかしまあ・・・」

この歓声は流石というどころだな。

この点は賞賛にすべきか？

『さあ勝者のキングの名前をたからかに宣言しようではないか！』

『『おおおぉぉ！』』

いや、少々むかつくな。

まあ、いいさ、

あいつの連勝記録に初黒星をつけるはこの私、

海馬（かいば）　蒼夜（そうや）なのだからな。

「ん？どうしたんだ。」

俺は何もないはずの方向に声をかける。

否、普通の人間にはそう見えないようにそいつがしているだけで契約者の私には見えているのである。

「蒼夜よ、近くで他の契約者がデュエルをしているが気がついたか？」
「ああ、俺も気がついていたさ。」
「で？」
「勿論行くつもりだ、だがその前に・・・・」
「ん？何かあるのか。」
「いや、ただキングでも誘おうと思ってね、何か不満はあるか？」
「ふぅん、お前は俺のマスターたなのだ、やりたいようにやるがいい。」
「では、そうさせてもらおう。」
俺達はその場をあとにした。

キング視点

「ふう、やっと控え室に戻ってこられた。」
デュエルが終わってから俺を待っていたのは記者からの質問責めだ

った。
今回のデュエルで４９連勝目というのもあって記者達から逃げるのはまるで戦場を駆けている気分だった。

コンコン

「ん？誰だ。」
「狭霧（さぎり）　深影（みかげ）です。
入っても宜しいでしょうか。」
「深影さんか、構いませんよ。」

俺が一息ついていると深影さんが訪ねてきた。

「明（あきら）様にお会いしたいと言っている方が居らっしゃるのですがどういたしましょうか？」
「会いたい奴？いったい誰だ。」
「海馬様です。」
「海馬？どの海馬だ。」
「蒼夜様です。」
「蒼夜か・・・
まあ、暇だしな、深影さん蒼夜を呼んできてくれないか。」
「分かりました、では直ぐにお呼びします。」
「ありがとう。」

深影さんが蒼夜を呼びに部屋を出て行く。

「さてと、蒼夜が来るまでは一息つ「ね～ね～、アニキ。」一息つきたい。」

一息つけると思ったが俺の精霊のおジャマ・イエローが名前の通り

ジャマをしてくる。
「何だおジャマ・イエロー、今はお前らと話す気にはなれんからあっちに行ってろ。」
そう言うと俺はおジャマ・イエローをシッシッと追い払おうとするが中々離れない。
「も～、いけずぅ～」
「うるさい！さっさとあっちに行け！」
「そんな事言わないでよ～アニキ。
あたし、蒼夜が此処に来る目的に心当たりがあるのよん。」
「何、それは本当か？」
「本当の本当だってば。」
おジャマ・イエローが何故か心当たりがあるのか知らないが、蒼夜の目的は知っておきたいし聞いてみるか。
「なら、話してみろ。
だが、嘘をついたら、ただじゃおかないからな。」
「嘘なんかつかないよ～、
じゃあ、説明するよ。」
おジャマ・イエローの説明はこういうものだった。
俺が記者の間を駆け抜けている時におジャマ・イエローが何らかの力を感じ取ったらしい、
おジャマ・イエローが言いたい事は恐らく、
自身が気付いた力に蒼夜の精霊が気付かないわけがないという事だろう。

「なる程なる程……ん？待てよ。」
「どうしたんだい、アニキ？」
こいつ程度が気付いたのならばアイツだって気付いた筈だ。
「どうしたもこうしたもない！」
「えっ？」
「お前が気付いて、光と闇の竜（ライトアンドダークネス・ドラゴン）が気付かないわけがないだろう！」
そうだ、こいつが気付いているのにアイツが何も言わないわけがない。
「何言ってるんだよアニキ？」
「何言ってる、だと、だから俺は「やだな～アニキ、光と闇の竜のデッキは五十戦目までは温存しようって四十戦目の時に言ってたじゃな～い。」
「あ……」
そうだった、
五十戦目までは出来る限り温存しようと決めたんだった。
「すまん。」
「いいよ、誰だって失敗はあるし。」
「明様、蒼夜様をお連れしました。」
話しがで終わったところでタイミングを見計らったかのようなところで深影さんが戻って来た。
「入ってくれ。」
「失礼するぞ、明。」

「久しぶりだな、蒼夜。」
「ああ、三ヶ月ぶりといったどころかな。」
「三ヶ月も会ってなかったのか。」
「そうだ、
それと、四十九連勝おめでとう。」
「心にもない言葉を言うな、皮肉にしか聞こえんぞ。」
「皮肉屋だから気にするなと、毎回言ってるだろう。」
「まあいいさ、それで何しに来たんだ。」
「それはな・・・」

説明を始めようとしたが深影さんを見て途中で止まる。
蒼夜の言いたい事を理解できたため、蒼夜が言う前に行動した。

「深影さん、ここからはプライベートな話しなんだ、席を外してくれないかい。」
「しかし、」
「深影さんにも聞かれたくにいような事なんだ、頼む。」
「・・・・・・分かりました、
それでは私は失礼します。」

そう言って深影さんが部屋を出て行く。
深影さんがどこか残念そうにしていた気がしたがのせいだろう。

「深影さんには悪い事をしまったな。」
「何がだ？」
「はあ、お前、周りに朴念仁とか勘の鈍い奴とか言われるだろ。」
「は？」
「いや、何でもないさ。
それよりも、話しを始めるぞ。」
「あ、ああ。」

「まあ、ここに来た理由の一つはそこのおジャマ・イエローから聞いているだろう。」
「どこかで力を使ってる連中が居るんだろ。」
「ふぅん、俺と同じ精霊と言えど貴様のようなザコモンスターに感じ取れるとは思わなかった。」
蒼夜が話し始めて直ぐに蒼夜の精霊「正義の味方　カイバーマン」がおジャマ・イエローをからかう（？）。
「カイバーマンさん、そんな事言わないでくださいよ、アニキも何か言ってやって下さいよ～！」
「ザコモンスターなんだから仕方あるまい。」
「アニキまで！？」
助け舟を求めて来た、おジャマ・イエローだったが俺に裏切られショックを受ける、
そんな状況を見かねて今までデッキで休んでいたと思われるおジャマ・グリーン、ブラックが出てくる。
「幾ら何でもそれは非道いだろうが～！
弟に謝れ～！」
「そうだそうだ、幾らカイバーマンさんと言えど、弟に謝らないと大変な事になるぞ～！」
「あんちゃん達！」
「安心しろ～、弟！
あんちゃん達がカイバーマンさんをギャフンと言わせてやるからな！」
「ほぉう、誰が誰をギャフンと言わせてやると言ったのかな。」
「「えっ？」」
「まさか、そこにいるお前達ではないだろうな？」

「えーと、ですね、」
「あのー、あっ！用事を思い出した、帰らなくては。」
「あっ！俺は三分しかこの世界にはいられないから帰る、じゃ、頑張れよ弟よ！」
「あ、あんちゃん！？」

そう言ってグリーンとブラックはイエローをおいてデッキに戻ってくる。
それを見ていて、今まで黙っていた蒼夜が飽きたのか話を再開させるため混ざってきた。

「そのくらいにしておけカイバーマン、
話がいっこうに始められん。」
「マスターの命令ならば仕方あるまい。」
「確かお前がしってるか確認するところまで話したんだったな。」
「そうだ。」
「そこで提案何だが、いまからそこに行かないか？」
「どうしてだ？」
「理由は簡単さ、争っている連中と会って話がしたいのさ。」
「なる程そういう事か。」

恐らく蒼夜は連中の片方でも俺達と目的が一緒ならば協力しあい、目的が一致せず後々に障害となる可能性があるのならば倒すという事だろう。

「それでお前を誘いに来たんだよ、
で？行くのか。」
「確かにそれは効率的に進められるだろうな。」
「という事は、」
「無論だ、精霊世界を救うには一人でも多くの人間が協力して救わ

なければならない。」
「そうだったな、俺達は精霊世界を救うんだったな。」
「そうだ、俺達は精霊世界を救う、
この俺、万丈目サンダーの名にかけて！！」

第十一話「白龍の契約者と雷の名を持つ者」（後書き）

やっと万丈目と海馬を登場させられた！

ＴＧの件ですが、

何故か機甲忍者とおジャマが俺の下に集まって来て全然できない。

（ＴＧ一直線で集めている筈なのに）

次回から刀侍達に戻ります。

第十二話「葛藤　前編」（前書き）

投稿が何時もより遅れてしまい申し訳ありませんでした。

私情により気仙沼に行っていたため執筆する時間が取れませんでした。

特に今月から1月にかけては忙しいので投稿が遅れる場合があります。

投稿がないからといって途中放棄などということはありませんので、もしも楽しみにしてくれている方がいるのでしたらご安心下さい。

長々と失礼しました、

では、本編が始めます！

第十二話「葛藤　前編」

鉄平視点

俺達やセキュリティが店についた頃にはサイコデュエリスト達は既にいなくなっていた。
店のガラスは全て割れ、
店内は棚が店の奥に吹き飛ばされていた。
襲撃のさいには一階に店員の深井さんがいたが店の奥から足りないパック取り出しにいっていた為に幸いにも怪我は軽傷ですんだ事を刀侍から聞いた。
その後に俺達はセキュリティから事情聴取をとられていた。

「さて、事情聴取はこれで終わりだ。
俺達はまだ此処にいるからな、送ってやるから、帰るんなら俺に言ってからにしてれ。」
「分かりました。
今回はありがとうございます、牛尾さん。」
「んな事は、気にすんなよ。」

この人の名前は牛尾（うしお）　哲（てつ）、
彼はセキュリティの捜査官だが、他のセキュリティよりも差別が少なために周りの新米からは「正義の捜査官」と言われ尊敬されているらしい。

「なあ鉄平、あいつらの事をもう一度聞いていいか？」
「ん？ああ、構いませんよ。
おーい、」

周りを見ていると牛尾さんが疑問を投げかけてきた。
俺は牛尾さんの疑問の正体もといソイツが分かり納得した。
俺はソイツを呼ぶと直ぐに反応し走って来た。

「呼びましたか？マスター」

ソイツとは精霊達の事である。
何故、牛尾さんに見えているかといえば、
全て説明すると長くなるので色々省くと、
牛尾さんをごまかせなかったのであった。

「おう、わりぃな、
それとマスターは止めてくれって言ったよな。」
「あっ！す、すみません！」
「まあ、少しずつ慣れていきゃいいさ。」

アウスと俺が話していると牛尾さんが話し始めたいらしく咳払いをした。

「そろそろ話しを始めたいんだけどな。」
「あ、すみません。、牛尾さん。
アウス、」
「はい、何でしょうか？」
「牛尾さんにもう一度、説明してくれないか。」
「分かりました。
どの辺から説明しますか？」
「ほんじゃ、その精霊世界の・・・・・」

アウスが説明をしている途中、
遊星の事が気になったが、

刀侍達が遊星の方に行った見ると俺が行かなくても大丈夫だろう。
そう結論付けるとアウスの説明に耳を傾けた。

刀侍視点

「遊星は何で見つからないんだ？」
「まったくよ、遊星め一体、何処に行ったのよ。」

ツァンと俺はそんな愚痴をこぼしながら遊星を探していると俺はセキュリティの中に見知った顔を見つけて声をかけた。

「切柄（きりづか）。」
「ん？刀侍くんにツァンちゃんか、一体どうしたんだい。」
「ちゃん付けで呼ぶな！」
「あ、ごめん、ごめん、
つい昔の癖でちゃん付けで呼でしまうんだ、許してくれよ。」

架宮（かみや）　切柄（きりづか）、
彼はセキュリティの捜査官で、牛尾の上司、
俺の母さんの兄で昔はツァンや遊星と一緒によく遊んでもらっていた、

竜と知り合った頃にある事件を追って世界中を飛び回っていたが、
長期間に渡って捕まえられないため代わりの捜査官が捜査している、
現在はネオ童実野シティに滞在している。

「まあいいわ、刀侍のお母さんのお兄さんだし許してあげるわ。」
「ありがとう、
それで何かようかな？」
「えっ？あ！あの、その遊星が、えーっと、」

切柄の言葉にツァンが目的を思い出したのかあたふたしだした。
その様子を見て切柄は苦笑する。

「あー、俺が説明するよ。」
「なら、頼むよ。」
「了解。」
「あの：刀侍・・・・」

テンパっているツァンに変わって説明を始めようとした時、ツァンが俺に声をかけてきた。

「ん、何だ？」
「その、ごめん・・・・」
「！？」

俺はツァンの謝りかたに驚愕した。
上目づかい＋涙目は反則だろ！！
くそ！今まではこんな事しなかった筈だ、
うおー、直視できん、
ツァンから俺は視線をずらしたが、
その行動が裏目にでる。

「やっぱり、怒ってるよね・・・」
「ぐはぁ！？」
駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だぁぁぁぁぁぁぁぁぁー！！
愛でたい、撫でたい、抱き締めたい！
今すぐに！
いや違うだろ、落ち着け、落ち着くんだ刀侍よ。
今はそんな事をしている場合じゃないだろ！
そうだ、遊星だ、遊星！

「と、刀侍、大丈夫？」
「気にするな！それと俺は怒ってないぞ！」
「そ、そうなの、」
「ああ、じゃあ用件を話すぞ！」
「はぁ～、青春だね。」
「何か言ったか？」
「いーや、何も言ってないさ、
で、始めなくていいのかな？」
「それじゃ、単刀直入に言うぞ、」
「ああ、」
「遊星を見かけてないか？」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・それだけなのか？」
「それだけだ。」
「それだけでこれだけの時間をつかったのか？」
「そうだ。」

そう言うと切柄がまるで呆れたように教えてくれた。

少し疲れているような切柄に礼をして俺達は遊星のもとへ向かった。

遊星視点

何故なんだ

どうしてなんだ

今、俺の頭の中にはそのような疑問しか出てこなかった。
現在、俺はカードショップの近くのベンチに
一人で座っていた。
ウィンが俺の心を察して一人にしてくれたのだ。
だが、今の俺は自分を責めているばかりだ、
黙っていれば心の中で疑問しかうまれず、
口を開けば自身を蔑む言葉や分からないという言葉しか出てこなかった。

「何故なんだ、どうしてアルカディアムーブメントなんかに、
どうしてだ、どうしてなんだ、
分からない、どうしたら・・・」

先程から、俺はこんな言葉を繰り返していた。
そして俺は、また口を開く。

「分からないんだ、
俺にはアキが分からない、
苦しいんだ、どうしようもなく苦しいんだ、
逃げたい、逃げたい！
この苦しみから逃げたい！
そうだ、全てを忘れれば、アキを忘れれてしまえ「ふざけるな！！」
！？」

最悪の言葉を口にしようとした時に後ろから張り上げた声が聞こえ
驚く。
すぐに我に返ると、その声の方向を振り向く。

「なっ！？」

俺はその姿を見て更に驚く、
何故なら、其処にいたのは、

「キング！？」

其処にいたのは万丈目　明、
ライティングデュエルキングだった。

第十二話「葛藤　前編」（後書き）

今回のお話の葛藤というのは遊星の心を指しています。

遊星は原作通りの性格とキャラクター設定では書いておりますが、作者こと、蟲の解釈で遊星は実は心が強くはなく、仲間がいないと何も出来なくなってしまうような人という設定にしました。

なので、こんなに遊星は心の弱い人ではないと思う方も多いと思うので謝罪をしておきます。

申し訳ございませんでした。

今回、キャラクターがまた増えました。

まあ、架宮切柄さんです。

彼はある物語から取ったつもりです！

ヒントはＺｅｒｏです。

もし、分かった方がいてここは違うというような指摘がありましたら、

ぜひ、感想に載せて教えて下さい。

第十三話「葛藤　後編」（前書き）

今回のお話はちょっと分かりづらいかもしれません。

遊星「いきなり英雄とか言われてもな～」

第十三話「葛藤　後編」

遊星視点

「キング！？」

どうしてキングがこんな所に！？
俺がそんな事を考えているのを見通しているかのようにキングが話し始めた。

「どうせ、此処にいる理由を知りたいんだろう、精霊の契約者。」
「なっ！？精霊の事を知っているのか。」
「は？お前は何を言っているんだ。
ある程度、力がある精霊と契約している奴は気付ける筈だ、特にお前のようにが馬鹿みたいに力がある精霊の契約者にはな。」

キングの言っていることは理解できたが同時に疑問が生まれた。
自分は何故、認識出来ないのかと、

「どういう事だ、お前の精霊は相当な奴の筈たぞ。」
「恐らく、精霊を御しれていないという事だろうな。」

考えを巡らせていると、唐突に現れた声によって現実に戻された。

「ああ、そういう事か、
ん？、そういえば自己紹介がまだたったな、
まあ、知っていると思うが俺の名前は万丈目明だ、それで俺の精霊は今日いるの奴はおジャマ・イエローにグリーンにブラックだ。」

そう言うとキング周りに恐らく精霊と思われるものが現れた。

「俺がブラック！」
「俺がグリーン！」
「僕がイエロー！」
「「「三人揃ってお「あいつらは無視してくれ、でないと話しが進まないからな。」そりゃないよ～、アニキ～！」
「分かった。」
「「「初対面の君も！？」」」

短い漫才が終わり自己紹介に戻る。

「それでこいつの名前はか「海馬蒼夜だ、私の精霊は正義の味方カイバーマンだ。」
「俺がカイバーマンだ。」

もう一人の男「海馬蒼夜」が自己紹介をした。
どうやら彼にも精霊がいたのか。
ん？海馬・・・！？って、まさか、

「ん？その様子だと気付いたみたいだな、
恐らく君が考えている通りだよ。
親父は海馬（かいば）　瀬人（せと）さ、とてもじゃないが誇れる事ではないがね、
私のことは気軽に蒼夜と呼んでくれ。」
「俺のことはキングと呼ばず万丈目か明のどちらかで呼べ、
それで、お前の名前は。」
「えっ、あ、俺の名前は遊星、不動遊星だ。」
「不動？」

俺が自己紹介をした時に蒼夜さんが割って入ってきた。

「遊星くん、君の父親はあの不動博士かい？」
「そうです、知っているんですか。」
「ああ、不動博士のおかげでＫＣはモーメントを利用出来ているようなものだからね。」
「世間話はそれぐらいにしておけ蒼夜。」
「フム、すまないな、明がうるさいから話はまた今度にしよう。」
「遊星「呼び捨てはあまりよくはな「うるさい！割って入ってくるな！」

蒼夜さんが明さんが話している途中に割って入ってきた、その事が気に入らないのか怒鳴り散らす、
その様子を見て蒼夜さんがやれやれというような表情を浮かべさがり話を再開した。

「呼び捨てで構わんな？」
「は、はい。」
「よし！
遊星、そこで一人で悩んでいた事だが独り言で断片的に入ってきたが、悩んでいた事が一つだけ分かった。
お前、誰かに裏切られただろ。」
「なっ！？別に裏切られたわけじゃ、」
「確かに裏切られていないかもしれない、
だが、それと似たような事をされたんざゃないのか？」
「っ！？」
「図星か。」
「違う！俺は「俺は何だ？だったらお前は何を忘れようとしていたんだ？」

その言葉に俺は黙ってしまう。

数秒の沈黙がとても長く感じた。
明さんの言葉が向き合いたくない現実を逃げたい現実を思い出させた。
その沈黙を破るかのように万丈目さんが手をさしのべてきた。
「話してみろ、力になってやれるかは分からないが、少し楽になるぞ。」
「・・・すまない。」

そして俺は話し始めた、
アルカディアムーブメントの襲撃、
アキがアルカディアムーブメントにいた事、
その現実への向き合いかたが分からない事、
全てを話した終わり、また、沈黙した世界が周りを支配する。
だが、この沈黙は数分も続かなかった、何故なら、

「フッ、フハハハハハハハハ、アッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」
「！？」

突然、カイバーマンが笑い出したのだ、
その様子にカイバーマン以外の全員が驚く。
徐々に状況を理解できたが同時に怒りがこみ上げてきた。

「俺の話の何が面白いんだ！」
「面白い？ハッ、馬鹿を言うな、
貴様の話には面白さなど微塵もないわ！あるのは貴様が臆病者だという事実だけだ！！」
「何だと！？俺のどこが臆病者だというんだ！」
「理解出来ていない今の貴様に言ったところで何の意味も無いわ！」

「止めろカイバーマン、
おい、蒼夜も黙って見てないでカイバーマンを説得してくれ。」
「止めないでくれマスター、こいつには教えねばならない事があるのだ、マスターも分かっている筈だ。」

カイバーマンの言葉を聞き蒼夜さんはカイバーマンをじっと見つめた、数秒後、蒼夜さんは了承したのか静かに目を閉じ、私は干渉はしないという意思を表した。

「おい、蒼夜！」
「いいから、黙って聞い聞いていろ。」
「！？……ちっ、」

蒼夜の出した答えに万丈目さんが反発しようとしたが、蒼夜が制止した事により納得はしていないようだが黙ってしまう。

「さて、話を再開しようじゃないか。」
「教えろ、何が臆病者だというんだ、」
「貴様に言ったところで無意味だと言った筈だが、ふぅん、まあ時間がたち先程よりは冷静さを取り戻しているようだしな、いいだろう教えてやる。」
「……」
「貴様は向き合い方が分からないと言っていたな。」
「ああ、」
「だが、貴様は本当に分からないのか？
否、貴様は自分自身がどうするべきか、その答えは最初から出ていた筈だ！
その女を救い出したいのだろう！」
「！？」
「しかし、貴様はその事実からあえて目を背けた、何故だ！

それは貴様自身がその女に裏切られたと思っているからだ！！」
「ッ！？」

まったくその通りだ。
カイバーマンが言っている事を俺は否定する事ができない。
カイバーマンはまるで俺の心を見ているかのように思えるほど俺の心を言葉に変えていったのだ、否定できるわけがない。

「ふっ、確かに俺は臆病者だな、
助けたいのに助けに行かないなんて、
俺は臆病者で最低の男だな。」
「遊星、」
「ふぅん、やっと気付いたか、そうだ貴様は臆病者だ。」
「なっ、カイバーマンそれ以上は「静にしておけ。」
「だが、蒼夜。」

何か言い争っている気がしたが今の俺にはどうでもいい事だ。

「しかし、貴様は一つ、間違えた解釈をしている。」
「？」
「確かに貴様は臆病者だ、だが、臆病者は決して最低などではない、臆病者とはもっとも進化の可能性を秘めているのだ、世の英雄の全てが最初から勇ましかったわけではない、あらゆる者と戦い、時には逃げ、時には負けることもあった、
だが、英雄達はその事実からそれぞれの大切なものを勝ち取っていたのだ！」
「大切なもの、」
「そうだ、人には必ずや臆病になる時がある、それは人が臆病者から英雄となるチャンスだ、そして今こそが貴様にとっての英雄になる時なのだ！」

「英雄に・・・
だが、俺は英雄なんて大層なものは目指してはいない。」
「確かに貴様は英雄など興味は無いだろう、
しかし、英雄とは臆病者から進化した姿！
そして貴様の言う女を救うには臆病者から進化しなくてはならない。
」
「何！？それはどういう事だ！」

カイバーマンの言葉は俺をどんどん引き込んでいく、次第に俺はカイバーマンの言う英雄に興味を持ち始めた。

「貴様が挑もうとしているのは女ではないだろう？」
「そうだ、アルカディアムーブメントだ。」
「そのような強大な勢力に臆病者一人が挑んだところで返り討ちにあうのがオチだ。」
「だが、お前の言う英雄も一人で挑んだところでは結果は変わらない。」
「貴様はまだ英雄というものを理解してはいないようだな、
英雄は自身の一人の結果でなるものではない、英雄とは常に仲間がいるものだ、自分自身が朽ち果てるまでついてくる仲間が。」
「仲間・・・」

そこで思い出したのだ、
俺にはかけがえのない仲間がいる事を、
アキに裏切られて少し忘れていた絆を、

「さて、ここまで言えば後の道のりは貴様自身で決めるがいい。」
「決めたぜ、カイバーマン、
俺は、俺自身の絆への思いを信じる！」
「なあ、遊星。」

決意表明をし終わると同時に万丈目さんが話しかけてきた。
「俺達にその英雄への道のりの手助けをさせてくれないか？」
「えっ？」
「お前が進む道を俺は見たいんだ、頼む。」
「いや頭を上げて下さい万丈目さん、
万丈目さんや蒼夜さんが助けてくれるのならこちらこそお願いします。」
「やれやれ、いつの間にか私まで協力する事になっているな。」
「構わないだろ蒼夜、
それに今回は理由もあるぞ。」
「理由？」
「遊星の精霊が精霊世界を滅ぼすような奴じゃないと俺の勘がつげているのさ。」
「理由になっていない気がするが、
まあ、今回のお前の勘については激しく同意だかね。」
話が終わったところで丁度いいタイミングで刀侍達の声が聞こえた。
さて、この状況をどう説明しようかな、などと考えながら刀侍達に駆け寄るのだった。

第十三話「葛藤　後編」（後書き）

今回は作者が思う英雄についての話でした。

次の話ですが、
そろそろクリスマスなので、
クリスマスの話でもやろうかと考えています。

まあ、考えている段階なのでやるかは分かりません。

やってほしいという方がおりましたら是非、
感想に書いてください！（多分やると思いますけど）

外伝第一話「それぞれのクリスマス」（前書き）

何とかクリスマスに間に合った～、

今回は長いです。

あと、新キャラも出てます。

外伝第一話「それぞれのクリスマス」

刀侍視点

俺とツァンは、イルミネーションで照らされている町の中を目立ちながら歩いていた。
何故目立っているかって、
それは、

「〜〜♪」

ツァンが鼻歌を歌いながら軽いスキップなどしていればそりゃあ目立つわ。

「やけにテンションが高いな、ツァン。」

まあ、仕方がないか、何たって今日は・・・・

「そんな事ないわよ、
べ、別に刀侍から誘ってくれた事と二人っきりのクリスマスが嬉しいとかじゃないんだからね！」
「へいへい。」

クリスマスだしなー
などと考えながら歩いていると、

ぶるっ！

突然、背筋に寒気がはしった。

その様子を見ていたツァンが心配そうにこえをかけてくる。

「どうしたの刀侍？」
「いや、何かよく分からんけど寒気が。」
「寒いの、まさか風邪？」
「いや、何かそういう温度差とか病気じゃないんだよ、何かこう見られてるみたいな。」
「見られてる？」

そう言った後にツァンは周りを見る。
いや、そこまで神経をすり減らすように見なくても。

「そこまで気にすんなよ、気のせいかもしれないしな。」
「私はそういう訳にはいかないのよ！
刀侍を他の女(ひと)に取られたくないの。」
「ッ！？」

ツァンの言葉に頬が赤くなる、
ツァン本人も勢いで言ったのか恥ずかしそうに頬を赤く染めていた。
二人の間に沈黙が生まれる、
何か話そうと思い話題を探すがなぜか思い付かない、いや、思い付いてはいても、言葉にする前に頭から消えてしまい言葉にできないのだ。
そんな考えを何度も巡らせていたが言葉出ない、こんな事では駄目だ、今回は俺がツァンに楽しんでもらいたくて誘ったんだ、なのにこんな事で動揺している場合ではない、
そして俺は意を決して話しかけた。

「・・・なあ、ツァン。」
「にゃ！な、何？」

「ありがとよ。」
「えっ？」
「だから、ありがとうって言ったんだよ、
ああもう、二回も言わすな恥ずかしくなったじゃねーかよ、ほら行くぞ！」
「……うん！」
そう言って俺達は歩き出した。

？？？？視点

はあ～、何でこんな事になったかね、

『何か見られてるみたいな。』
『見られてる？』
「！」
「まずい、お前ら隠れろ！」

通信機のような機械から流れてきたターゲットの声に反応した一人が小さな声で命令する、
そして周りにいた連中が素早い動作で隠れる、私も一様ターゲットから見えない場所に身を隠す。

どうやらターゲットが周りを警戒しているようだ。
「・・・・・ターゲットが警戒態勢を解除したようだな。」
「そうみたいね。」
「でも、さっきの会話って重要だったよね。」
「そうね、あのツァンが、まさかの刀侍独り占め宣言をするとはね、ツァンも中々、大胆な事を言うようになったわね。」
「マスターも中々やるわね。」

この場は色々な意味で混沌としているな。
まあ、先程の会話は聞いてる私も恥ずかしくなったからな。
何故、聞こえているかといえば、
雪代がどこからか調達した盗聴器を持ってきて刀侍の服に仕掛けたのだ。
犯罪だろ・・・

「あいつら動き出したぞ。」
「行くわよ、明、ヒータ、カイバーマンに蒼夜、それと切柄さん、」

呼び捨てとは、
まあ、かしこまっていないほうが、私としても楽だからいいがね。
今、この場所にいるメンバーは先程、話していた彼女、雪代星を含め、精霊のヒータ、セキュリティで何故か精霊が見えている架宮切柄、それと万丈目明、あとカイバーマン、そして私は海馬蒼夜だ。
ん?私は一体誰に説明をしているんだ、
疲れているのかね。

「蒼夜、何をぼさっとしているの!
さっさと行くわよ。」
「了解、」

「これは色々な意味で成功させなければならないのよこの作戦をそう、
刀侍とツァンのクリスマスデートを見て学園でいじっちゃおう大作戦！」
「「いえーい！」」

この雪代星、
本当にルーンの瞳の所持者か？
ほとんど私情じゃないか。
というか二人、明にヒータ！
何故、賛同しているんだ！
くそ、何か疲れてきた。

「「はあ～、」」

つい、ため息をついてしまった時、私以外のため息が隣から聞こえてきた。
聞こえてきた方向を見ると同じように切柄さんが疲れたような顔してこちらの方を見ていた。

「お互いに大変だね。」
「そのようですね。」

ウム、この人とは気が合いそうだ。
そう思い、私達はもう一度だけ顔を見合わせた後、異常なテンションの彼らと一言も喋らず傍観者を気取っているカイバーマンのもとに走り出した。

遊星視点

「みんなは何で俺達の事を連れてってくれなかったんだろうな、竜。」

「それは多分、俺達が真面目すぎるからだよ、遊星。」

「そうか、だからこんなに精霊をあずけられたのか、竜。」

「そうかもね、遊星。」

何故、俺達だけ軽く貧乏くじなのだ、

今思うと、刀侍とツァンの精霊を快く預かったのが行けなかったのだろうな。

そこ漬け込まれて、星に色々な精霊を預けられてしまったのだろうな、というか、何でおジャマトリオがいるんだ。

「クリスマスなのに、」

「どうして、」

「「こんなに悲しいんだぁぁーー！！」」

その日、デュエルアカデミアの寮の二階に悲しい叫び声が響いた。

刀侍視点

くそ！
俺は完全になめていた、
今更ながら後悔していた、
何が俺に後悔をさせたのかその正体は・・・・

デートって、すげー疲れる！
行き当たりばったりて駄目たわ、

そんなこんなで現在は、休憩をとっている、
今は一体何時だ、
そう思い時計を見ると六時半すぎだった、
それを見て頑張ったな俺は真っ白に燃え尽きかけたが、燃え尽きる寸前で意識を保つ、
そうだ、
まだ、終わらせる訳にはいかないのだ。
理由は簡単だ、

クリスマスプレゼントを渡してないのだ！

ここで、止めてしまえば色々な意味でヤバイのである。
言わなくも分かるだろ？
まあ、実際はプレゼントは決まっているので後は渡せばいいのだが渡すタイミングが中々、こないのだ。

よく、チャンスは待つものではない自身で掴むものだと言うが、そんな事は幻想にすぎない。
自身で掴もうとしたが逆に渡しずらくなっているからだ。
まあ、色々な邪魔（星達）がいたのは事実だが、

「ちくしょー！」
「！？ど、どうしたの、刀侍？」
「あ、いや、気にするな。」
「いやいや、今のは気になるわよ。」
「何でもない、ただ叫びたくなっただけだ、
お前もたまにそんな事があるだろう？」
「まあ、なくもないけど。」
「だろ、だから気にするな。」
「うん、」

何とか騙せたな、
さてと、どうしたもんかな、
そう思いなるべく冷静なって考える、
うーむ、

ん？そういえば今の時間帯のあそこなら、
フム、良いかもしれないな、
入るの大変だけどまあ何とかなるだろ、
その考えをまとめるて立ち上がる。

「刀侍？」
「ツァン、最後にお前に見せたい物があるんだ。」
「見せたい物？」
「それでよ、そこに行くにはちょっと時間がかかんだけどよかまわねーか？」

「え？構わないけど。」
「そうか、ありがとよ、ほんじゃ早速行こうぜ。」
そう言って俺は走り出す、
「ちょ、ちょっと待ってよ！」
「あ、わりぃわりぃ、」
そうか、確かツァンはそんな速く走れないんだったな、
その事を思い出し、ツァンの手を握る。
その時、ツァンが顔を真っ赤に染めていた事など全く気付かず。

三十分後、

「よし、着いた。」
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、何で……なのよ、」
「ん？」
「何で学校の屋上なのよーー！！」

そう、俺達はデュエルアカデミアの屋上に来たのだ。
「おわ！？
馬鹿、大声出すな、わざわざ後藤に頼んでルートを確保してもらったんだぞ、
ばれたら努力もとい屈辱が水の泡だろうが。」
「でも、何で学校なのよ。」
まあ、ツァンの疑問も、もっともだろうな、
その理由を俺はツァンに伝える。
「空を見てみろよ。」
「空？」
そう言ってツァンが見上げると、
そこにあったものは、
「星？」
「ああ、」
夜空に広がる星だった。
「でも、何でこんなに星が見えるの？」
「この学校って、土地だけは以上にでけーだろ？」
「うん、確かに。」
「それでよ、蒼夜さんに聞いたんだけどよ、どうやら創立者の海馬瀬人は俺達、生徒にこの星を見せて希望を持ってもらいたかったらしいんだ。
それで創立者は周りの光が当たらないように馬鹿でかい土地にして、

星を見えるようにしたんだとよ。」

ツァンに説明する。
さて、説明はこれくらいにしておくか、
そして決意する。

「ツァン、」
「何？刀侍、」
「その、お、俺とつ、つ、つきあ「君たち、そこで一体何をしてるにゃー？」「「ぎゃあぁぁぁぁぁーー！？」」

宣言仕掛けた時にどこらともなく大徳寺が現れる。

「見つけたのが私以外だったら即刻退学ものにゃー、さあ、速く寮に戻るにゃ。」
「「…はい、」」

そう言い俺達はこの場を後にした。
寮に帰っている途中、
ツァンが何かを思い出したかのように疑問をぶつけてきた。

「そういえば、刀侍、
さっきは一体何を言おうとしていたの？」

そして俺は思い出してしまう、
言おうとしていた事を、
そして俺がその疑問に答えた。

「何でもねぇよーーー！！」

答えと共に落ちていた小石を天高く投げた。

外伝第一話「それぞれのクリスマス」（後書き）

クリスマス編はいかがだったでしょうか？
楽しんでいただけたでしょうか？
こういった外伝はまた機会があればかきたいです。
まあ、さすがに正月は早過ぎ気がするので止めておきます。

さて、今回の話では大徳寺先生が出てきましたが、あれはちゃんと今後の話で出てきます。
鉄平が居なかった理由もいつか分かります、鉄平はいちいち居なくなったりします。この理由は大分後半で判明します。

次回は久しぶりにデュエルアカデミアでの話です。

感想をお待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5214x/

遊戯王5D's　霊使いと六人の決闘者

2011年12月24日00時45分発行